

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野  
東京大学医学部家族看護学教室

年報 (第6号)

平成15年4月～平成17年3月

## はじめに

家族看護学教室年報の第6号が出来上がり、皆様にお届けできる運びとなりました。

平成4年10月以来、当教室を育ててこられた杉下知子前教授が平成15年3月31日をもって定年退職され、平成15年4月1日からは上別府が助教授として教室の主任を務めさせていただいております。上別府は前年度に着任したばかりでしたので、不馴れな点も多くありましたが、健康科学・看護学専攻の諸先輩方や教室員に支えていただき、平成15～16年度を無事終えることができました。この場を借りて皆様にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

この二年間の大学事情といたしましては、平成16年4月から国立大学が法人化し、東京大学も国立大学法人東京大学となったことがあげられます。これに伴い、大学も附属病院も、新たに魅力的な特色を打ち出していく変革の時期を迎えていると言えます。専攻内の変化としましては、母性看護学・助産学分野に引き続いて老年看護学分野も本格的に活動を開始し、長年当教室が担って参りました学部教育の責務が分担化されたことがあげられます。今後は、「家族看護学」の専門性を高め、世界の「家族看護学」のテーブルにつけるような教室にしていきたいと夢を抱いているところです。

平成15年度より教室の新しい活動といたしまして、「家族ケア症例研究会」および「家族ケアフォーラム」を開始いたしました。これらの研究会は、研究者・教育者の養成に加えて、「家族看護学の実践力習得」を大学院の教育目標として新たに定めたことに伴いまして、院生のトレーニングの場としての位置づけをもつものです。またこれらの研究会は、附属病院や地域との連携の構築および、家族看護学の社会教育（地域への貢献）をもう一つの目標としております。附属病院をはじめとして近郊の病院、保健センターや大学などから、看護職を中心に教員、保育士、医師、心理士など多職種が集い、毎回、熱気あふれるディスカッションが展開されていますことを皆様にご報告でき、たいへん嬉しく思います。

またこの間に、学士2名（佐藤伊織君、佐々木彩子君）、修士4名（松本和史君、涌水理恵君、杉浦仁美君、古田正代君）、博士2名（池田智子君、細坂泰子君）が、本学より学位を授与されました。

教室員の異動としましては、平成15年4月からの小林奈美助手の研究休職に伴い、尾関志保先生が助手として就任し、また同年10月に山崎あけみ先生が講師として就任しました。平成16年5月には小林奈美先生が鹿児島大学助教授として転出し、平成17年3月には尾関志保先生が日本赤十字社医療センターへ転出することになりました。平成17年度は、教員3名でスタートする予定です。

今後とも、当教室へのご理解と、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

平成17年3月31日

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野  
助教授 上別府 圭子

# 目 次

はじめに

## 1. 教育活動

1-1. 担当講義・実習 . . . . . 2

1-2. 卒業論文・修士論文・博士論文 . . . . . 4

## 2. 研究活動

2-1. 研究費 . . . . . 5

2-2. 学術研究業績 . . . . . 7

2-3. 学内外の公的活動 . . . . . 24

2-4. 国際交流活動 . . . . . 26

3. 教室カンファレンス . . . . . 27

## 4. 家族看護学教室研究会

4-1. 家族看護学研究会 . . . . . 41

4-2. 家族ケア症例研究会 . . . . . 43

5. 家族ケアフォーラム . . . . . 44

6. 教室の沿革 . . . . . 45

7. 資料 . . . . . 46

家族看護学教室 教室員（平成 15 年度～平成 16 年度）

1. 教育活動

1-1. 担当講義・実習

平成 15 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学の基礎 と展開	教養学部総合科目 D 人間・環境一般	2	1・2	前期	木	16:20~17:50
看護実践活動 入門	全学自由研究 ゼミナール	1	1・2	夏休み 集中講義	月~木	9:00~16:10
健康科学・看護学 概論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	火	9:00~10:30
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	木	9:00~12:10
総合看護学	編入生選択	2	3	後期Ⅰ	水	13:00~17:50
小児看護学	看護必修	分2	3	後期Ⅰ-2	月 木	9:00~12:10 16:20~17:50
家族看護学	看護必修、選択	2	3	後期Ⅱ	火	13:00~16:10
小児看護学	看護必修	分2	4	前期Ⅱ	月 火	9:00~17:50 13:00~17:50
小児看護学実習	看護必修	2	4	後期	月~金	8:00~15:00

※ 開講時期

前期Ⅰ	4月7日	~	5月30日	8週
前期Ⅱ	6月2日	~	7月18日	7週
前期Ⅲ	9月1日	~	10月17日	7週
後期Ⅰ	10月20日	~	12月5日	7週
後期Ⅱ	12月8日	~	2月6日	7週
後期Ⅲ	2月9日	~	3月5日	4週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ	4月~7月
家族看護学特論Ⅱ	10月~12月

平成 16 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学の基礎 と展開	教養学部総合科目 D 人間・環境一般	2	1・2	前期	木	16:20~17:50
看護実践活動 入門	全学自由研究 ゼミナール	1	1・2	夏休み 集中講義	火~金	9:00~16:10
健康科学・看護学 概論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	火	9:00~10:30
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	木	9:00~12:10
小児看護学	看護必修	分2	3	後期Ⅰ-2	月	9:00~12:10
家族看護学	看護必修、選択	2	3	後期Ⅱ	火	13:00~16:10
小児看護学	看護必修	分2	4	前期Ⅱ	月	9:00~16:10
					木	9:00~12:10
小児看護学実習	看護必修	2	4	後期	月~金	8:00~15:00

※ 開講時期

前期Ⅰ	4月5日	~	5月28日	8週
前期Ⅱ	5月31日	~	7月16日	7週
前期Ⅲ	8月30日	~	10月15日	7週
後期Ⅰ	10月18日	~	12月3日	7週
後期Ⅱ	12月6日	~	2月4日	7週
後期Ⅲ	2月7日	~	3月4日	4週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ	4月~7月
家族看護学特論Ⅱ	10月~1月

## 1-2. 卒業論文・修士論文・博士論文

平成 15 年度

卒業論文

佐藤伊織：

きょうだいを小児がんでなくした青年期女性の語りに見る悲哀の仕事  
—母子関係ときょうだい関係に注目して—

佐々木彩子：

男性保健師が性別と関係づけて認識している職業上の経験に関する研究

修士論文

涌水理恵：

外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱およびその関連要因

松本和史：

悪性腫瘍の早期臨床試験における看護師の困難感に関する質的研究

博士論文

池田智子：

**The associated factors of depression among workers at small or medium sized enterprises in Japan**

(和訳) 日本の中小企業労働者における抑うつに関連要因

平成 16 年度

修士論文

古田正代：

生後 1 ヶ月の第 1 子を養育する母親の抑うつ及び関連要因

杉浦仁美：

東京都の中学校教師のメンタルヘルスに関連する要因

博士論文

細坂泰子：

癌専門病院における  $\beta$ -lactam antibiotic induced vancomycin-resistant MRSA (BIVR)  
の検出状況と薬剤感受性試験、および遺伝学的分類方法に関する研究

## 2. 研究活動

### 2-1. 研究費

平成15年度、平成16年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））「在宅療養者を抱える家族が捉える訪問看護師の存在と看護介入内容に関する研究」（研究課題番号15592330）500千円

河原宣子，上別府圭子，杉下知子

平成15年度三重県立看護大学学長特別研究費「高齢・過疎化の進行する地域における在宅療養者の家族が意識する家族認知の範囲と訪問看護師の役割に関する研究」140千円

河原宣子，杉下知子，上別府圭子

平成15年度第12回ファイザーヘルスリサーチ振興財団日本人研究者海外派遣事業「家族の関係性に変化を促す介入研究とその評価法の検討」2,000千円

小林奈美

カナダ政府奨学金 Post-Doctoral Fellowships “Beliefs about illness and frailty: stories told by Japanese-Canadian old couples.” 7,500CAD

小林奈美

平財団法人在宅医療助成 勇美記念財団 2003年度在宅医療助成金「痴呆性高齢者グループホームの入居前後におけるQOLおよび家族との関係性の変化に関する研究」800千円

松井典子，水野陽子，梅橋千恵子

平成15年度、平成16年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（A））「高齢者への安全なケア提供を目的とした循環器系自律神経活動のモニタリング機器の開発」（研究課題番号15689026）6,620千円

松井典子

平成15年度厚生労働省老人保健健康増進事業等「痴呆ケアにおけるリスクマネジメントー痴呆性高齢者の転倒事故の要因とリスク評価にもとづく事故防止策の研究ー」13,485千円  
須貝佑一（委員長），山本里美，岩本陽子，辰巳祐介，千葉忍，橋谷トミ，町田沢子，池知智津子，曾根栄子，板垣晃之，佐藤峰子，金井裕子，郡司和郎，妙圓菌晃，鈴木希衣子，高橋好美，五十嵐千冬，中山小夜子，松井典子

平成15年度厚生労働省老人保健健康増進事業等「痴呆の早期発見と早期対応が及ぼす痴呆ケアのあり方の変容に関する研究」13,430千円

杉下知子（委員長），丸井英二，松村康弘，林邦彦，松井典子，吉田亮一，須貝佑一，山路一義，山本里美，井上秀子，橋谷トミ，田近松枝，島村淑子

平成15年度公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金「痴呆性高齢者のケア方法の確立と評価に関する研究」1,000千円

杉山智子

平成15年度財団法人医療科学研究所研究助成「外科的小手術を受ける幼児へのプリパレーションに関する研究」500千円

涌水理恵，上別府圭子

平成16年度、平成17年度、平成18年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)「小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラムの開発」（課題番号16390635）12,100千円

上別府圭子，星順隆，井田孔明，滝田順子，尾関志保

財団法人がんと子供を守る会平成16年度小児がん治療研究助成「がんの子どもの痛みと心理社会的要因に関する研究」（研究課題番号3）500千円

上別府圭子，星順隆，尾関志保

平成16年度（財）メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「次世代育成に関わる者のメンタルヘルス（その1）」400千円

上別府圭子，中島一憲，杉浦仁美

平成16年度日本看護協会出版会研究助成金「生後1カ月の乳児を持つ養育者のメンタルヘルスに関する研究」160千円

古田正代，上別府圭子，松井典子，村上睦子，長内佐斗子

2 - 2. 学術研究業績

論文(原著論文・総説)

Kamibeppu, K., Ono, K., Go, T.: Postnatal depression with consequent difficulties in child rearing: intervention through psychotherapy and support systems. *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 43(Suppl.), 122-136, 2002.

Kamibeppu, K.: Posttraumatic stress disorder in children with cancer: process of recovery and preventive intervention, *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 44 (Suppl.), 112-128, 2003.

Kamibeppu, K.: Reconsideration of "Motherhood" in contemporary Japan, *The American Journal of Psychoanalysis*, 65 (1), 13-29, 2005.

Kamibeppu, K., Sugiura, H.: The impact of mobile phone on the junior high-school students' friendship in Tokyo metropolitan area, *CyberPsychology and Behavior*, 8 (2), 2005 (in press).

Yamazaki, A., Lee, K., Kennedy, H., Weiss, J.: Sleep-wake cycles, social rhythms, and sleeping arrangement during Japanese childbearing family transition. *JOGNN: Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing*, 34(3), 2005.

Kawada, M., Okuzumi, K., Hitomi, S., Sugishita, C.: Transmission of staphylococcus aureus between healthy, lactating mothers and their infants by breastfeeding, *Journal of Human Lactation*, 19(4), 411-417, 2003.

上別府圭子: 導入段階の基本に立ち返る (松本論文『問題を持ちつづけることのできないクライアントへの企業内相談室でのかかわり』に対するコメント), *精神分析研究*, 47(4), 509-511, 2003.

吉村奏恵, 兼田智彦, 上別府圭子他: 学校における子どもの虐待の発見 (日本子どもの虐待防止研究会第8回学術集会特集 分科会報告), *子どもの虐待とネグレクト*, 5(1), 81-85, 2003.

竹内奈緒子, 古田正代, 上條優子, 木村美枝子, 松本和史, 渡邊久美, 上別府圭子: 看護におけるコミュニケーション“フォーカスグループインタビュー”による考察, *看護実践の科学*, 28(9), 66-71, 2003.

上別府圭子, 星順隆, 戸邊さえ子, 亀口憲治, 尾関志保, 深堀浩樹, 杉浦仁美: 小児がん治療中の子どもの家族ケア実践をめぐる検討, *家族看護*, 2(1), 140-146, 2004.

上別府圭子, 杉浦仁美: ケータイメールが中学生の友人関係に及ぼす影響—首都圏5公立中学校における調査—, *こころの健康*, 19(1), 73-82, 2004.

上別府圭子: 症例検討 (水島みゆき, 山崎透: 『いけないことを考えてしまう』強迫性障害女兒への遊戯療法過程) へのコメント, *児童青年精神医学とその近接領域*, 45(3), 271-273, 2004.

上別府圭子: 「サイコセラピューティックな看護 / Psychotherapeutic Nursing」の展望, *精神療法*, 30(6), 675-682, 2004.

上別府圭子: 医療領域におけるサイコセラピューティックケアのトレーニング, *日本サイコセラピー学会雑誌*, 5(1), 12-17, 2004.

増井起代子, 上別府圭子: 治療的検査<バウムテスト・HTP・家族画・風景構成法・スクリブルとスクイグル・箱庭療法>, *臨床精神医学*, 増刊号, 2004.

上別府圭子: 「家族看護における心理教育的アプローチ」, 亀口憲治編 「現代のエスプリ—家族療法の現在」, 451, 127-138, 至文堂, 2005.

山崎あけみ: 形成期の家族ケア—第1回 家族をつくる女性を取り巻く Social-cultural context (社会的・文化的文脈), *ペリネイタルケア*, 22(11), 1001-1004, 2003.

山崎あけみ: 形成期の家族ケア—第2回 ファミリーコミュニケーション—, *ペリネイタルケア*, 22(12), 1138-1141, 2003.

山崎あけみ: 形成期の家族ケア—第3回 安全な居場所でなくなったとき—, *ペリネイタルケア*, 22(12), 1142-1145, 2003.

ルケア, 23(1), 73-76, 2004.

山崎あけみ: 形成期の家族ケア—第4回 産声をあげなかった家族成員—, *ペリネイタルケア*, 23(2), 162-165, 2004.

山崎あけみ: 形成期の家族ケア—第5回 家族の多様性を求めて—, *ペリネイタルケア*, 23(3), 280-283, 2004.

山崎あけみ: 看護職が取り組む博士論文・計画段階での迷い方 (前編), *Quality Nursing*, 10(10), 951-957, 2004.

山崎あけみ: 看護職が取り組む博士論文・計画段階での迷い方 (後編), *Quality Nursing*, 10(11), 1055-1061, 2004.

山崎あけみ, 本間裕子, 竹ノ上ケイ子, 綿貫成明: アメリカの看護を料理する—第5回 ナースが進学を決意するときに見る夢—, *臨床看護*, 30(12), 1883-1889, 2004.

須貝佑一, 杉山智子, 小林奈美: [高齢者の精神医療と事故] 高齢者の精神医療における事故防止の試み; リスクマネジメントの試み, *老年精神医学雑誌*, 14(6), 734 - 739, 2003.

杉山智子, 松井典子, 杉下知子: アルツハイマー型中期痴呆症患者に対する望ましいケアの検討: 排泄・身支度ケアへの抵抗に注目して, *老年看護学*, 8(1), 31-38, 2003.

太田垣美保, 山下美緒, 染谷淑子, 溝口直子, 高橋まなみ, 森谷美智子, 松井典子: 看護師の資格・ストーマケア経験年数別の人工肛門造設患者の性指導, *日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会会誌*, 8(2), 36-42, 2004.

浅香知子, 黒木寛子, 鶴木桂子, 足立めぐみ, 野田蓮子, 松井典子: 脊髄損傷女性の性行為及び性の意識に関する年齢別実態調査, *母性衛生*, 45(4), 481-488, 2005.

深堀 浩樹, 須貝 佑一, 水野 陽子, 松井 典子, 杉下 知子: 特別養護老人ホーム入所者の家族介護者における精神的健康とその関連要因, *公衆衛生学雑誌*, 52(5), 2005 (in press).

綿貫成明, 仲井美由紀, 尾関志保: アメリカの看護を料理するー第1回ー看護留学生たちの見る夢, 臨床看護, 30(8), 1285-1292, 2004.

綿貫成明, 仲井美由紀, 尾関志保: アメリカの看護を料理するー第2回ー夢は専門的で独立的な「上級実践看護師」, 臨床看護, 30(9), 1425-1433, 2004.

尾関志保, 綿貫成明, 仲井美由紀: アメリカの看護を料理するー第3回ー夢は効果的な痛みへのケア, 臨床看護, 30(10), 1585-1596, 2004.

綿貫成明, 仲井美由紀, 尾関志保: アメリカの看護を料理するー第9回(最終回)ーアメリカの看護を料理する心得: 夢を現実にする「料理人」の仕事, 臨床看護, 31(3), 407-417, 2005.

池田智子, 美ノ谷新子, 宮本郁子, 杉下知子: 学生の視点による地区踏査実習, 保健婦雑誌, 59(10), 960-967, 2003.

細坂泰子, 花木秀明: 肺炎の病態③ 耐性菌, 臨床看護, 30(10), 1504-1508, 2004.

細坂泰子, 花木秀明, 林泉, 上別府圭子, 砂川慶介:  $\beta$ -lactam antibiotic induced vancomycin-resistant MRSA (BIVR)の疫学調査ーCZX添加・無添加による比較ー, 感染症学雑誌, 78(8), 717-21, 2004.

田中香織, 花木秀明, 柳沢千恵, 上原一晃, 山口幸恵, 細坂泰子, 茨田一成, 酒井芙実子, 池田進輔, 漆原敏之, 田中晴雄, 砂川慶介: Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* (MRSA)が産生するhemolysinに対するヒト免疫グロブリン製剤の効果, Medical Postgraduates, 42(2), 140-144, 2004.

大木桃代, 小瀧一, 尾上裕子, 福田直子, 村山明美, 畠山高年, 宮崎菜穂子, 中村アキエ, 遊佐希, 三浦洋子, 佐田礼子, 松本和史: トランスレーショナルリサーチ・コーディネーター業務の経過と各職種における専門性および問題点の明確化, 文教大学人間科学研究, 25, 89-97, 2003.

佐藤伊織, 星順隆, 上別府圭子: 同胞を小児がんでなくした青年期女性の語りにみる悲哀

の仕事, *児童青年精神医学とその近接領域*, 46(1), 56-64, 2005.

渡邊久美, 上別府圭子: 母乳哺育を6か月間継続した母親の体験 Baby-Friendly-Hospital におけるインタビュー調査から—, *小児保健研究*, 64(1), 65-72, 2005.

著書・編著・教科書ほか

上別府圭子: 人間としての発達, p16-24/杉下知子, 武藤安子監修: 発達と保育—育つ・育てる・育ちあうサポートブック, 教育図書株式会社, 2003.

上別府圭子: チームとして機能するための教育, p55-68/眞野元四郎, 高坂要一郎, Betty Furuta, 谷岡哲也著: 続 精神障害者のためのヘルスケアシステム—学際的なチームケアモデルと実践のガイドライン, 西日本法規出版, 2003.

上別府圭子: こころのはたらき Q30 自分の夢と自分の心理状態は関連があるのでしょうか?, p49/谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著: 精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子: こころの病気の発生と予防 Q64 人前で緊張しなくなるためには、どうしたらいいですか?, p83/谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著: 精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子: 心理検査 Q83 テレビや雑誌でよく見かける心理テストは、信用できるのでしょうか?, p103/谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著: 精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子: 心理検査 Q90 心理テストの結果を患者さんに説明するのは、医師ですか、看護師ですか?あるいは臨床心理士ですか?, p110/谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著: 精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子: 心理検査 Q91 患者さんは、すんなりと心理テストを受けてくれるものでしょうか?, p111/谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著: 精神障害をやさしく理解する Q&A 253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子：心理検査 Q92 心理テストは被験者のその日の感情や気分によって違ってくると思うのですが、違った結果が出た場合、どう判断するのですか？, p112／谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著：精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子：心理検査 Q93 精神科外来で研修をしましたが、心理テストの判定結果を知らせている気配がありません。心理テストの結果は、本人には知らせないものなのでしょうか？知らせないのは、何か問題があるから知らせないのでしょうか？, p113／谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著：精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

上別府圭子：対応のしかた Q167 私は感情がすぐ表に出てしまいます。看護師には向いていないのでしょうか？, p187／谷岡哲也, 瀧川薫, 眞野元四郎, 高坂要一郎編著：精神障害をやさしく理解する Q&A253, 日総研出版, 2003.

佐々木敦, 上別府圭子：第8章 心理臨床とリエゾン, p145-169／吉田弘道編著：ライフサイクルと心理臨床, 八千代出版, 2004.

上別府圭子：死にゆく子どもと家族へのメンタルサポート, p300-301／上島国利, 牛島定信, 武田雅俊他 監修・編集, 生涯教育シリーズ 64 精神障害の臨床 (日本医師会雑誌特別号 第131巻第12号), 2004.

上別府圭子：家族の特性・機能と負担感, p144-150 /坂田三允総編集：精神看護エクスペール 4 長期在院患者の社会参加とアセスメントツール, 中川書店, 2004.

上別府圭子：男らしい上司との食事場面で震えていた中年男性, p47-51／菅佐和子編著：医療現場に生かす臨床心理学 (『看護に生かす臨床心理学』改訂改題), 朱鷺書房, 2004.

上別府圭子：看護師がどうしても腹の立つ母親へのアプローチ, p216-221／菅佐和子編著：医療現場に生かす臨床心理学 (『看護に生かす臨床心理学』改訂改題), 朱鷺書房, 2004.

山崎あけみ：母子保健と女性保健の変遷, p17-54, 第1章2～4節／吉沢豊予子編：女性生涯看護学：リプロダクティブヘルスとジェンダーの視点から, 真興交易医書出版部, 2004.

松井典子：IV-5 児童虐待，p334-337／日本母性衛生学会監修：ウィメンズヘルス事典，中央法規出版株式会社，2003.

松井典子：IV-6 育児，p338-341／日本母性衛生学会監修：ウィメンズヘルス事典，中央法規出版株式会社，2003.

#### 研究会議・報告書など

上別府圭子，杉浦仁美：携帯 e メールが思春期の対人関係に及ぼす影響—首都圏 5 公立中学校における実態把握—，2002 年度（財）安田生命社会事業団研究助成論文集，第 38 号，p48-57，2003.

平成 14 年度厚生労働省老人保健健康増進等事業による研究報告書．三センター共同研究事業「痴呆ケアにおけるリスクマネジメント」に関する研究のうちの痴呆性高齢者における転倒事故の要因と事故防止策の研究（研究統括責任者：須貝佑一，委員：小林奈美他），2003.

平成14年度厚生労働省老人保健健康増進等事業による研究報告書.高齢者の自立支援及び元気高齢者づくりのための調査研究等事業.痴呆性高齢者の長期介護に関する研究のうちの痴呆性高齢者の予後追跡調査研究（委員長：杉下知子，委員：松井典子他），2003.

「痴呆ケアにおけるリスクマネジメント・痴呆性高齢者の転倒事故の要因とリスク評価にもとづく事故防止策の研究」東京センター分担分野報告書（平成 15 年度厚生労働省老人保健健康増進等．分担研究責任者：須貝佑一，委員：松井典子他），2003.

深堀浩樹，松井典子，杉下知子：財団法人医療科学研究所研究助成金報告書．施設サービスの質の家族による評価とその関連要因についての研究，2003.

高齢者の自立支援及び元気高齢者づくりのための調査研究等事業.痴呆の早期発見と早期対応が及ぼす痴呆介護のあり方の変容に関する研究（平成 15 年度厚生労働省老人保健健康増進等．委員長：杉下知子，委員：松井典子他），2004.

痴呆性高齢者グループホームの入居前後における QOL および家族との関係性の変化に関する

る研究完了報告書（財団法人在宅医療助成勇美記念財団 在宅医療助成金 研究代表者：松井典子）

平成 15 年度厚生労働省老人保健健康増進等事業による研究報告書 三センター共同研究事業「痴呆ケアにおけるリスクマネジメント」に関する研究（研究班班長：水野裕，委員：松井典子他）

NPO 法人子育てネットワークとかち，下村一，涌水理恵：子育てネットワークの人材育成：保育系短大生の子育て支援体験を通しての意識変容，独立行政法人福祉医療機構子育て支援基金助成事業。子育てサークルネット支援事業報告書，p92-98，2004.

松本和史，杉下知子，上別府圭子，山下直秀，濱尾房子，尾上裕子：悪性腫瘍の早期臨床試験における患者の負担および看護師の困難に関する研究報告書（平成 14 年度日本看護協会出版会 研究助成金），2004.

#### 学会・研究発表

Kamibeppu, K., Sugiura, H., Fukahori, H.: The Impact of Mobile Phone on the Junior High-School Students' Friendship in Metropolitan Area (Poster Session L: School & Community Mental Health), The 3rd Congress of the Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Nov 8-9, 2003, Taipei, Taiwan.

Fukahori, H., Matsui, N., Mizuno, Y., Yamamoto-Mitani, N., Sugai, Y., Sugisita, C.: Family visits to residents of nursing homes in Tokyo, The 7th Asia/Oceania Regional Congress of Gerontology, Nov 24-28, 2003, Tokyo, Japan.

Pae, S., Matsui, N., Hashitani, T., Sugai, Y., Sugishita, C.: Therapeutic communication techniques used by care workers toward the elderly in a nursing home in Tokyo. The 7th Asia/Oceania Regional Congress of Gerontology, Nov 24-28, 2003, Tokyo, Japan.

Kamibeppu, K., Sato, I., Hoshi, Y.: Qualitative study on mourning work of adolescents bereaved of siblings by childhood cancer, The 16th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (IACAPAP), Aug 22-26, 2004, Berlin, Germany.

Yamazaki, A.: Family synchronizer: Predictor of sleep-wake rhythm for Japanese First-time mothers in the early postpartum. Japan Academy of Nursing Science, Fifth International Nursing Research Conference, Aug 29-31, 2004, Fukushima, Japan.

Ikeda, T., Nakata, A., Hojo, M., Nishikido, N., Kamibeppu, K., Sugishita, C.: Association between job stress and depressive symptoms among workers at small-sized enterprises in Japan, International Symposium on Occupational Health, Nov, 2004, Nagoya, Japan.

錦戸典子, 遠藤俊子, 京谷美奈子, 池田智子, 江村晴子: 中小企業における健康づくりー従業員の満足度と健康意識の変化ー, 第76回日本産業衛生学会, 2003年4月23-17日, 山口県山口市.

杉浦仁美, 上別府圭子: 携帯eメールが思春期の対人関係に及ぼす影響ー首都圏5公立中学校における実態把握ー, (財)安田生命社会事業団 2002年度研究助成成果報告会, 2003年7月19日, 東京都.

中村晃士, 縣俊彦, 清水英佑, 牛島定信, 上別府圭子: 青年期女性の公的自意識, 私的自意識と完全主義傾向の関連, SAS Institute Japan ポスターセッション, 第22回 SUGI-J 2003, 2003年7月31日-8月1日, 東京都.

池田智子, 関島英子, 松寄英士, 吉田由美, 宮本郁子, 庚玉秀, 梶山祥子, 五島瑛智子: 看護職員の退職後の生活設計と関連要因第2報ー中華人民共和国8地域における病院勤務看護師の調査ー, 第7回日本看護管理学会年次大会, 2003年8月22-23日, 神奈川県横浜市.

関島英子, 池田智子, 松寄英士, 吉田由美, 宮本郁子, 庚玉秀, 梶山祥子, 五島瑛智子: 看護職員の退職後の生活設計と関連要因第3報ー中規模以上の病院勤務看護師の調査ー, 第7回日本看護管理学会年次大会, 2003年8月22-23日, 神奈川県横浜市.

渡邊久美, 上別府圭子: 6ヶ月間の母乳哺育を継続した母親の母乳哺育への意思と継続要因ーBaby-friendly-Hospitalにおけるインタビュー調査からー, 第18回日本母乳哺育学会学術集会, 2003年9月19-20日, 東京都.

深堀浩樹，水野陽子，松井典子，山本則子，杉下知子：都内特別養護老人ホーム利用者家族が利用者に面会を行う理由，日本家族看護学会第10回学術集会，2003年9月27-28日，高知県高知市。

山下真紀子，松井典子，森谷美智子，松田智恵，山崎智恵子，山下恵子，山田裕子：父親の育児支援に対する夫婦間の認識の相違が母乳栄養継続に与える影響，第44回日本母性衛生学会総会，2003年10月9-10日，栃木県宇都宮市。

上田恵子，越前屋昌子，片岡蘭，鈴木弥生，松井典子，森谷美智子，貴家和江：分娩前後での育児行動に対するイメージの相違が分娩後の主観的疲労度に与える影響，第44回日本母性衛生学会総会，2003年10月9-10日，栃木県宇都宮市。

深堀浩樹，須貝佑一，水野陽子，松井典子，杉下知子：都内特別養護老人ホーム利用者の家族介護者の精神的健康度とその関連要因，第62回日本公衆衛生学会，2003年10月22-24日，京都府京都市。

原谷隆史，高橋正也，中田光紀，福井里江，深澤健二，藤岡洋成，小川康恭，荒記俊一，仲眞美子，齋藤玲子，池田智子，高橋美香子，影山隆之，北條稔，佐藤剛：職場における慢性頭痛の疫学調査，第62回日本公衆衛生学会総会，2003年10月22-24日，京都府京都市。

涌水理恵，杉下知子：小児をもつ家族を対象とした保健医療情報・看護情報のニーズ調査，第50回日本小児保健学会，2003年11月13-15日，鹿児島県鹿児島市。

杉浦仁美，上別府圭子：携帯電話が中学生の心理・友人関係に与える影響，第50回日本小児保健学会，2003年11月13-15日，鹿児島県鹿児島市。

杉山智子，松井典子，小林奈美，須貝佑一：特別養護老人ホーム痴呆介護棟における痴呆性高齢者の転倒事故のリスク要因，第4回日本痴呆ケア学会大会，2003年11月22-23日，宮城県仙台市。

福井里江，原谷隆史，高橋正也，中田光紀，深澤健二，小川康恭，荒記俊一，藤岡洋成，池田智子，仲眞美子，齋藤玲子，高橋美香子，北條稔，長井チエ子，島悟：労働者の片頭痛と職

業性ストレスとの関連，第 11 回日本産業ストレス学会，2003 年 11 月 28-29 日，東京都。

上別府圭子，尾関志保，深堀浩樹，小田切房子：助産学生へのカウンセリング授業のあり方の検討—アサーションとロールプレイを中心としたプログラム—，第 23 回日本看護科学学会学術集会，2003 年 12 月 6-7 日，三重県津市。

NPO 法人子育てネットワークとかち，下村一，中込裕子，涌水理恵：子育てネットワークの人材育成：保育系短大生の子育て支援体験を通しての意識変容，子育てネットワーク全国フォーラム，2004 年 1 月 31 日，東京都。

細坂泰子，花木秀明，茨田一成，酒井芙実子，柳沢千恵，砂川慶介： $\beta$ -ラクタム薬とバンコマイシンが拮抗する MRSA (BIVR) の検出状況と生物学的調査，第 19 回日本環境感染学会，2004 年 2 月 20-21 日，神奈川県横浜市。

酒井芙実子，花木秀明，山口禎夫，茨田一成，細坂泰子，柳沢千恵，砂川慶介：1979 年から 2003 年間の  $\beta$ -ラクタム薬とバンコマイシンが拮抗する MRSA (BIVR) の検出状況，日本環境感染学会，2004 年 2 月 20-21 日，神奈川県横浜市。

柳沢千恵，花木秀明，茨田一成，酒井芙実子，田中香織，細坂泰子，砂川慶介： $\beta$ -lactam 薬と vancomycin が拮抗作用を示す MRSA (BIVR) 株に対するニューキノロン系薬 pazufloxacin と各種抗菌薬の併用効果，日本環境感染学会，2004 年 2 月 20-21 日，神奈川県横浜市。

茨田一成，花木秀明，柳沢千恵，細坂泰子，酒井芙実子，田中香織，東出正人，岩田敏，砂川慶介：各種 A 群レンサ球菌抗原検出キットの比較評価結果について：日本環境感染学会，2004 年 2 月 20-21 日，神奈川県横浜市。

細坂泰子，花木秀明，柳沢千恵，茨田一成，酒井芙実子，林泉，上別府圭子，砂川慶介： $\beta$ -lactam antibiotic induced vancomycin resistant-MRSA (BIVR) の検出状況と生物学的調査，第 78 回日本感染症学会総会，2004 年 4 月 6-7 日，東京都。

柳沢千恵，花木秀明，茨田一成，酒井芙実子，細坂泰子，砂川慶介：MRSA に対する pazufloxacin と抗 MRSA 薬との併用効果及び P.aeruginosa に対する pazufloxacin と arbekacin

の併用効果, 第 78 回日本感染症学会総会, 2004 年 4 月 6-7 日, 東京都.

茨田一成, 花木秀明, 柳沢千恵, 酒井芙実子, 細坂泰子, 砂川慶介: ABK に対する MRSA の段階的耐性獲得の検討, 第 78 回日本感染症学会総会, 2004 年 4 月 6-7 日, 東京都.

酒井芙実子, 花木秀明, 茨田一成, 柳沢千恵, 細坂泰子, 砂川慶介: “ $\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA (BIVR)” の耐性メカニズムの検討, 第 78 回日本感染症学会総会, 2004 年 4 月 6-7 日, 東京都.

水野陽子, 木村一秋, 松井典子: 入居決定後に罪悪感を抱き続けた娘介護者に対する家族相談の実践例, 全国痴呆性高齢者グループホーム大会 2004 年フォーラム, 2004 年 5 月 15-16 日, 大阪府大阪市.

中山和弘, 戸ヶ里泰典, 近藤佳代子, 宇城令: 米国の大学におけるウェブサイトによる市民向け健康情報の提供方法と内容, 第 13 回日本健康教育学会, 2004 年 6 月 3-5 日, 栃木県壬生町.

細坂泰子, 花木秀明, 柳沢千恵, 茨田一成, 酒井芙実子, 林泉, 砂川慶介:  $\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA (BIVR) および MRSA, MSSA に対する  $\beta$ -lactam 薬と VCM の併用効果, 第 52 回日本化学療法学会総会, 2004 年 6 月 3-4 日, 沖縄県宜野湾市.

酒井芙実子, 花木秀明, 茨田一成, 柳沢千恵, 細坂泰子, 上原一晃, 山口幸恵, 砂川慶介: “ $\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA (BIVR)” の耐性メカニズムの検討, 第 52 回日本化学療法学会総会, 2004 年 6 月 3-4 日, 沖縄県宜野湾市.

柳沢千恵, 細坂泰子, 酒井芙実子, 茨田一成, 花木秀明, 林泉, 砂川慶介:  $\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA (BIVR) の VCM 耐性に与える培養時間と  $\beta$ -ラクタム薬の影響, 第 52 回日本化学療法学会総会, 2004 年 6 月 3-4 日, 沖縄県宜野湾市.

渡邊久美, 上別府圭子: 6ヶ月間母乳育児を継続した母親の体験—BFHでのインタビュー調査から—, 第9回岡山小児医療研究会, 2004年6月6日, 岡山県岡山市.

池田智子, 上別府圭子, 錦戸典子, 中田光紀, 北條稔, 杉下知子: 小規模事業場労働者の

職業性ストレスモデル第2報—抑うつに関連要因の男女別分析—, 第7回日本地域看護学会学術集会, 2004年6月12-13日, 大阪府吹田市.

松井典子, 須貝佑一: 我が国における施設高齢者の転倒事故に関する文献的検討, 第19回日本老年精神医学会, 2004年6月25-26日, 長野県松本市.

通水理恵, 尾関志保, 上別府圭子: 外科的小手術を受けた子どもの心理的混乱に関する研究, 第14回日本小児看護学会, 2004年7月16-17日, 宮崎県宮崎市.

通水理恵, 上別府圭子: 小手術を受ける子どもの心理的準備に関する実態調査, 第14回日本外来小児科学会, 2004年8月21-22日, 大分県大分市.

佐藤伊織, 上別府圭子, 星順隆: 小児がんで亡くなった子どものきょうだい—青年期女性の語り—にみる悲哀の仕事—, 日本家族看護学会第11回学術集会, 2004年9月3-4日, 兵庫県神戸市.

山崎あけみ: 産後4-5週の夫婦の概日リズムによる類型化と乳児の睡眠との関連, 第11回日本家族看護学会, 2004年9月3-4日, 兵庫県神戸市.

廣田順子, 高田恵理子, 宮崎潤子, 萩原直美, 森谷美智子, 松井典子: 妊娠中の初産婦がパートナーに求める日常生活援助, 第45回日本母性衛生学会総会, 2004年9月16-17日, 東京都.

太田垣美保, 山下美緒, 染谷淑子, 溝口直子, 高橋まなみ, 森谷美智子, 松井典子: 人工肛門造設患者の性に関する指導: 資格・指導経験年数別の検討, 第45回日本母性衛生学会総会, 2004年9月16-17日, 東京都.

山下美緒, 太田垣美保, 染谷淑子, 高橋まなみ, 溝口直子, 森谷美智子, 松井典子: 人工肛門造設患者の性に関する指導: 患者の性別による検討, 第45回日本母性衛生学会総会, 2004年9月16-17日, 東京都.

松井典子, 勝村雄二, 木村一秋, 水野陽子: 娘介護者が母親のグループホーム入居決定に至るプロセス: 娘介護者の家族構成による違い, 第5回日本痴呆ケア学会大会, 2004年9

月 18-19 日，新潟県新潟市.

水野陽子，勝村雄二，木村一秋，松井典子：グループホーム入居決定に至るプロセスと入居後の新たな関係構築；主たる介護者が配偶者の痴呆性高齢者の場合，第 5 回日本痴呆ケア学会大会，2004 年 9 月 18-19 日，新潟県新潟市.

池田智子，上別府圭子，錦戸典子，中田光紀，北條稔，杉下知子：小規模事業場労働者の職業性ストレス—経営者または経営者の家族従業員における抑うつ—の関連要因の男女別分析—，第 63 回日本公衆衛生学会総会，2004 年 10 月 27-28 日，島根県松江市.

戸ヶ里泰典，中山和弘，的場智子，近藤佳代子，宇城令：ヘルスプロモーションのために大学が提供する市民向け Web サイトの可能性（第 1 報），第 63 回日本公衆衛生学会総会，2004 年 10 月 27-28 日，島根県松江市.

涌水理恵，尾関志保，上別府圭子：外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱とその関連要因，第 51 回日本小児保健学会，2004 年 10 月 28-30 日，岩手県盛岡市.

涌水理恵，尾関志保，上別府圭子：短期入院し手術を受けた子どもの入院中と退院後の心理的混乱の関係，第 24 回日本看護科学学会，2004 年 12 月 4-5 日，東京都.

寺田高子，花木秀明，柳沢千恵，細坂泰子，茨田一成，新藤郁子，砂川慶介： $\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA (BIVR) の検出に及ぼす NaCl の影響，第 20 回日本環境感染学会総会，2005 年 2 月 24-26 日，兵庫県神戸市.

柳沢千恵，花木秀明，寺田高子，細坂泰子，大石智洋，砂川慶介： $\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA (BIVR) に対する VCM の抗菌力に及ぼす諸因子の検討，第 20 回日本環境感染学会総会，2005 年 2 月 24-26 日，兵庫県神戸市.

#### 講演・シンポジウムなど

上別府圭子：こどもの心の発達と遊び 第 4 回研修会—こどもについて学ぶ—，東大病院ニコニコボランティア，2003 年 1 月 13 日，東京都.

狩野力八郎, 上別府圭子: 境界例臨床における多職種コラボレーション, 第99回日本精神神経学会総会, 2003年5月28日, 東京都.

上別府圭子: 被虐待児・その後～回復の機会～, 被虐待児への治療に関する研修会—地域と医療機関の連携—, あいち小児保健医療総合センター, 2003年7月19日, 愛知県大府市.

上別府圭子: 子どもの病と家族, 第1回家族ケアフォーラム, 病気の子どもを育てる家族のケア—多職種の視点—, 東大家族ケア研究会, 2003年7月22日, 東京都.

上別府圭子: 女性のための健康相談・カウンセリング的演習, 健やか親子21「女性の健康エクササイズセミナー」—妊産婦体操実践指導員養成講習会—, (社)全国保健センター連合会, 2003年8月6日, 東京都.

上別府圭子: 水島みゆき, 山崎透「いけないことを考えてしまう」強迫性障害女兒への遊戯療法過程(症例検討, 助言), 第44回日本児童青年精神医学会総会, 2003年10月22-24日, 福岡県福岡市.

山崎あけみ: 看護学研究, 女性研究者の会・京都 講演会, 2003年11月15日, 京都府京都市.

上別府圭子: 赤ちゃんと家族を応援する, 第21回関東ブロック乳児院協議会職員研修会, 関東ブロック乳児院協議会・東京都社会福祉協議会乳児部会, 2003年11月21日, 東京都.

吉川武彦, 上別府圭子: 『若い発表者を励ます』～若い力による演題発表と、先輩からの助言～(助言), 第19回日本精神衛生学会大会, 2003年11月22-23日, 東京都.

上別府圭子: 「ママパパライン」支え手(スーパーバイザー), NPO法人 子ども劇場全国センター, 2003年12月4日, 東京都.

上別府圭子: 医療領域におけるサイコセラピューティック・ケアのトレーニング, 第5回日本サイコセラピー学会 シンポジウム「サイコセラピストの養成と認定」, 2004年1月24-25日, 東京都.

上別府圭子：東京都看護協会東部地区支部 第13回看護研究・実践報告会（助言），2004年2月14日，東京都。

山崎あけみ：博士論文における研究方法の選択，高知女子大学看護学部 特別講義，2004年2月15日，高知県高知市。

上別府圭子：医療現場における臨床心理士の機能—家族と医療チームのアセスメントとケア—，「こころ」のリハビリ研究会，2004年3月12日，徳島県徳島市。

上別府圭子：家族看護学から学ぶ—ケア実践における『家族』のとらえ方と家族ケアの実践—，日本家族カウンセリング協会，2004年3月20日，東京都。

上別府圭子：女性のための健康相談・カウンセリング的演習，健やか親子21平成16年度「女性の健康エクササイズセミナー—妊産婦体操実践指導員養成講習会—」，(社)全国保健センター連合会，2004年8月17日，東京都。

上別府圭子，川谷大治，妙木浩之ほか：ボーダーラインの外来治療—ATスプリットを中心に—，日本精神分析学会第50回記念大会教育研修セミナー，2004年10月1-3日，東京都。

上別府圭子：家族を支える：医療の立場から，平成16年度 保育関係者が行う子育て相談研修会（基礎編），こどもの城，2004年10月23日，東京都。

上別府圭子：「家族看護の現状と課題」，フォーラムさつき，2004年11月27日，東京都。

上別府圭子：「看護とサイコセラピー」，第6回日本サイコセラピー学会 シンポジウム「看護・教育・PSW のサイコセラピー」，2005年1月29-30日，東京都。

細坂泰子：第2回感染対策総合セミナー：「院内感染総論」日本福祉大学通信教育部，2005年3月5日，東京都。

花木秀明，細坂泰子：第2回感染対策総合セミナー：「現場からの感染対策の疑問に答えるワークショップ」日本福祉大学通信教育部，2005年3月5日，東京都。

一般雑誌・新聞その他

上別府圭子：「女性同士、上手な付き合いを一職場進出増え、悩む人間関係」，2003年9月5日毎日新聞（朝刊）家庭欄取材記事，2003.

上別府圭子：書評「傳田健三著『子どものうつ病―見逃されてきた重大な疾患』（金剛出版）」，心と社会，34(3)，136，2003.

上別府圭子：書評「キャシー・マルキオディ著 角山富雄，田中勝博監訳『被虐待児のアートセラピー-絵からきこえる子どものメッセージ-』（金剛出版）」，児童青年精神医学とその近接領域，(44)4，66-67，2003.

上別府圭子：書評「遠藤裕乃著『ころんで学ぶ心理療法 初心者のための逆転移入門』（日本評論社）」，精神療法，(29)6，130-131，2003.

上別府圭子：編集後記，心と社会，34(4)，121，2003.

山崎あけみ：ヒューマンサイエンス，世界思想，31，31-35，2004.

上別府圭子：現代家族と保育への期待，子育て支援のニュースレター 19，5-6，こどもの城 保育研究開発部，2004.

上別府圭子：児童虐待について理解するための3冊，こころの健康，19(2)，97-98，2004.

上別府圭子：書評「キャロル・リヴィングストン 文 / 庄司順一訳『どうして私は養子になったの？』」，心と社会，36(1)，111，2005.

## 2-3. 学内外の公的活動

### 上別府圭子

- 1998年 - 日本児童青年精神医学会 編集委員 (- 2004年3月)
- 2000年 - 日本児童青年精神医学会 評議員
- 2003年 - 日本児童青年精神医学会第44回大会 プログラム委員 (- 2003年10月)
- 2004年 - 日本児童青年精神医学会 福祉に関する委員会委員
- 2002年 - 日本精神神経学会第99回大会 プログラム委員 (- 2003年5月)
- 2002年 - 日本精神衛生学会 理事
- 2003年 - 日本精神衛生会 「こころと社会」編集委員
- 2004年 - 日本サイコセラピー学会 常任理事

### 松井典子

- 2003年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会評議員
- 2004年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会理論部会シンポジウム(第1回)「医療と安全」実行委員
- 2004年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会 安全技術部会ワークショップ「医療事故予防のための医療機器、医薬品および医療情報システムの連携」(第1回)組織委員
- 2004年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会教育シンポジウム(第2回)「リスク哲学・リスク経済学からみた医療制度のあり方」組織委員
- 2004年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会 JSRMPM 教育シンポジウム(第3回)「臨床におけるリスクコミュニケーションのあり方-医療の質としての医療リスクコミュニケーションの構築の課題」組織委員
- 2004年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会ワークショップ「臨床医学と地域医療における危機管理医学のあり方」実行委員
- 2004年 - 第24回日本看護科学学会学術集会実行委員
- 2005年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会環境部会第1回シンポジウム「災害に対する安全対策および危機管理医学のあり方」組織委員

### 尾関志保

- 2004年 - 第24回日本看護科学学会学術集会実行委員

座長・司会

- 2003年7月22日 上別府圭子座長，松井典子，尾関志保司会，第1回家族ケアフォーラム「病児の子育て」
- 2003年10月10日 松井典子座長，第44回日本母性衛生学会学術集会「助産師，保健師等2」
- 2004年7月9日 上別府圭子座長，山崎あけみ，尾関志保司会，第2回家族ケアフォーラム「病児のきょうだいを支援する」
- 2004年9月3-4日 上別府圭子座長，日本家族看護学会第11回学術集会「ターミナルケア」
- 2004年11月3-5日 上別府圭子座長，第45回日本児童青年精神医学会総会「摂食障害(4)」
- 2004年11月20-21日 上別府圭子座長，日本精神衛生学会創立20周年記念大会「地域・集団支援」

2 - 4. 国際交流活動

Post-Doctoral Fellowship. Family Nursing Unit, University of Calgary.

2003年4月-2004年4月, 小林奈美, Calgary, Canada

### 3. 教室カンファレンス

平成 15 年度

4 月 15 日

杉山智子 (論文抄読)

Roth, D.L., Stevens, A.B., Burgio, L.D., Burgio, K.L.: Timed-event sequential analysis of agitation in nursing home residents during personal care interactions with nursing assistants, *Journal of Gerontology*, 57B(5), 461-468, 2002.

涌水理恵 (研究経過報告)

(仮題) 小児病棟に暮らす患児が抱えるストレスとその関連要因について

4 月 22 日

ペスッキ (論文抄読)

Caris-Verhallen, W.M.C.M., Gruijter, I.M., Kerkstra, A., Bensing, J.M.: Factors related to nurse communication with elderly people, *Journal of Advanced Nursing*, 30(5), 1106-1117, 1999.

松本和史 (研究経過報告)

早期臨床試験に参加する悪性腫瘍患者の経験・ニーズ・サポートに関する研究

5 月 6 日

細坂泰子 (論文抄読)

Weiss, S.J., Wilson, P., St.John Seed, M., Paul, S.M.: Early tactile experience of low birth weight children: links to later mental health and social adaptation, *Infant and Child Development*, 10, 93-115, 2001.

古田正代 (研究経過報告)

修士論文経過報告

5 月 13 日

古田正代 (論文抄読)

Da Costa, D., Larouche, J., Dritsa, M., Brender, W.: Psychosocial correlates of prepartum and postpartum depressed mood, *Journal of Affective Disorders*, 59, 31-40, 2000.

細坂泰子 (研究経過報告)

子どもの発達に関する研究－母性・父性に着目して－

5 月 20 日

深堀浩樹 (論文抄読)

McCallion, P., Toseland, R.W., Freeman, K.: An evaluation of a family visit education program, *Journal of American Geriatrics Society*, 47, 203-214, 1999.

杉山智子 (研究経過報告)

痴呆性高齢者のケア方法に関する研究 (ケア場面の観察を通して)

5月27日

松本和史 (論文抄読)

Fukui S.: Information needs and the related characteristics of Japanese family caregivers of newly diagnosed patients with cancer, *Cancer Nursing*, 25(3), 181-186, 2002.

河原宣子 (研究経過報告)

高齢・過疎化の進行する地域における在宅療養者の家族が意識する家族認知の範囲と訪問看護の役割に関する研究

6月3日

池田智子 (論文抄読)

Tsutsumi, A., Kayaba, K., Nagami, M., Miki, A., Kawano, Y., Ohya, Y., Odagiri, Y., Shimomitsu, T.: The effort-reward imbalance model: experience in Japanese working population, *Journal of Occupational Health*, 44, 398-407, 2002.

深堀浩樹 (研究経過報告)

博士課程研究計画に向けて—これまでのまとめとこれから—  
施設入居痴呆性高齢者の家族に対する面会支援のための教育プログラムの開発および効果測定

6月10日

涌水理恵 (論文抄読)

Ellerton, M., Marriam, C.: Preparing children and families psychologically for day surgery: an evaluation, *Journal of Advanced Nursing*, 19, 1057-1062, 1994.

古田正代 (研究経過報告)

乳児の持続する涕泣の実態と母親のメンタルヘルスに関する研究

6月17日

日下修一 (論文抄読)

Patterson, D.G., Macpherson, J., Brady, N.M.: Community psychiatric nurse aftercare for alcoholics: a five-year follow-up study, *Addiction*, 92(4), 459-468.

涌水理恵 (研究経過報告)

手術を受ける小児への Psychological Preparation の導入と評価

6月24日

杉浦仁美（論文抄読）

Clarke, M., Coombs, C., Walton, L.: School based early identification and intervention service for adolescents: a psychology and school nurse partnership model, *Child and Adolescent Mental Health*, 8(1), 34-39, 2003.

佐藤伊織（研究経過報告）

プリパレーションの実態調査、およびプリパレーション実現のための要因探索

松本和史（研究経過報告）

修士課程での研究の進捗状況

7月1日

山下 仁（論文抄読）

Sohn, P.M., Cook, C.A.L.: Nurse practitioner knowledge of complementary alternative health care: foundation for practice, *Journal of Advanced Nursing*, 39(1), 9-16, 2002.

杉浦仁美（話題提供）

教育実習体験報告

7月8日

浅香知子（論文抄読）

Chang, Y., Anderson, G., Lin, C.: Effects of prone and spine positions on sleep state and stress responses in mechanically ventilated preterm infants during the first postnatal week, *Issues and Innovations in Nursing Practice*, 40(2), 161-169, 2002.

7月15日

杉浦仁美（研究経過報告）

卒業論文要旨発表

浅香知子（研究経過報告）

Developmental Care について

9月2日

杉浦仁美（論文抄読）

Johnson, J.G., Harris, E.S., Spitzer, R.L. Williams, J.B.W.: The patient health questionnaire for adolescents: Validation of an instrument for the assessment of mental disorders among adolescent primary care patients, *Journal of Adolescent Health*, 30, 196-204, 2002.

深堀浩樹（家族看護学会予演）

演題：都内特別養護老人ホーム利用者家族が利用者に面会を行う理由

9月9日

松本和史 (論文抄読)

Vaartio, H., Kiviniemi, K., Suominen, T.: Men's experiences and their resources from cancer diagnosis to recovery, *European Journal of Oncology Nursing*, 7(3), 182-190, 2003.

Elmberger, E., Bolund, C., Lutzen, K.: Men with cancer. Changes in attempts to master the self-image as a man and as a parent, *Cancer Nursing*, 25(6), 477-485, 2002.

細坂泰子 (研究経過報告)

Vancomycin と  $\beta$ -lactam 薬が拮抗する MRSA (BIVR) の疫学調査

9月16日

涌水理恵 (研究経過報告)

外科的小手術を受ける子どもの不安と術後行動の実態およびその関連因子

深堀浩樹 (日本公衆衛生学会予演会)

演題: 都内特別養護老人ホーム利用者の家族介護者の精神的健康度とその関連要因

9月30日

ペスッキ (論文抄読)

小石真子, 藤田利治: 痴呆性老人のデイケア継続とその関連要因. *日本公衆衛生雑誌*, 47(6), 517-529, 2000.

杉山智子 (研究経過報告)

(仮題) 痴呆性高齢者におけるコミュニケーションに関する研究

佐々木彩子 (研究経過報告)

(仮題) 男性保健師の経験とその経験が職業アイデンティティに及ぼす影響

10月7日

日下修一 (論文抄読)

Aalto, M., Pekuri, P., Seppa, K.: Primary health care nurses' and physicians' attitudes, knowledge and beliefs regarding brief intervention for heavy drinkers, *Addiction*, 96, 305-311, 2001.

杉浦仁美 (日本小児保健学会予演)

演題: 携帯電話が中学生の心理・友人関係に与える影響

11月11日

杉浦仁美 (日本小児保健学会予演会)

演題: 携帯電話が中学生の心理・友人関係に与える影響

杉山智子 (日本痴呆ケア学会予演会)

演題：特別養護老人ホーム痴呆介護棟における痴呆性高齢者の転倒事故のリスク要因

11月18日

深堀浩樹（論文抄読）

Sandberg, J., Lundh, U., Nolan, M.: Moving into a care home: the role of adult children in the placement process, *International Journal of Nursing Studies*, 39, 353-362, 2002.

深堀浩樹（アジア・オセアニア国際老年学会予演）

演題：Family visits to residents of nursing homes in Tokyo

11月25日

松本和史（研究経過報告）

悪性腫瘍の早期臨床試験に関わる看護師の困難感

12月2日

細坂泰子（論文抄読）

Kampf, G., Adena, S., Ruden, H., Weist, K.: Inducibility and potential role of MecA-gene-positive oxacillin-susceptible *Staphylococcus aureus* from colonized health care workers as a source for nosocomial infections, *Journal of Hospital Infection*, 54, 124-129, 2003.

佐藤伊織（研究経過報告）

子ども時代の同胞との死別と悲嘆過程

佐々木彩子（研究経過報告）

男性保健師の経験とその経験が職業アイデンティティに及ぼす影響

12月9日

杉山智子（論文抄読）

Scovdahl, K., Kihlgren, A.L., Kihlgren, M.: Dementia and aggressiveness: video recorded morning care from different care units, *Journal of Clinical Nursing*, 12, 888-898, 2003.

松本和史（研究経過報告）

悪性腫瘍の早期臨床試験における看護師の困難感に関する質的研究

池田智子（学位論文発表予演）

日本の中小企業労働者における抑うつに関連要因

12月16日

涌水理恵（研究経過報告）

外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱およびその関連要因

浅香知子（論文抄読）

Westrup, B., Hellstrom-Westas, L., Stjernqvist, K., Lagercrantz, H.: No indications of increased quiet sleep in infants receiving care based on the Newborn Individualized Developmental Care and Assessment Program (NIDCAP), *Acta Paediatrica*, 91, 318-322, 2002.

1月6日

深堀浩樹（研究経過報告）

修士論文（都内特別養護老人ホーム利用者家族の面会に関する研究）投稿進捗状況

1月13日

ペスッキ（論文抄読）

Lucas, J.W., Barr-Anderson, D.J., Kington, R.S.: Health status, health insurance, and health care utilization patterns of immigrant black men, *American Journal of Public Health*, 93(10), 1740-1747, 2003.

1月20日

松本和史（修士論文発表予演）

悪性腫瘍の早期臨床試験における看護師の困難感に関する質的研究

涌水理恵（修士論文発表予演）

外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱およびその関連要因

1月27日

松本和史（修士論文発表予演）

悪性腫瘍の早期臨床試験における看護師の困難感に関する質的研究

涌水理恵（修士論文発表予演）

外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱およびその関連要因

2月3日

佐藤伊織（卒業論文発表予演）

きょうだいを小児がんでなくした青年期女性の語りに見る悲哀の仕事～母子関係と  
きょうだい関係に注目して～

佐々木彩子（卒業論文発表予演）

男性保健師が性別と関係づけて認識している職業上の経験に関する研究

2月10日

佐藤伊織（卒業論文発表予演）

きょうだいを小児がんでなくした青年期女性の語りに見る悲哀の仕事～母子関係と

きょうだい関係に注目して～

佐々木彩子（卒業論文発表予演）

男性保健師が性別と関係づけて認識している職業上の経験に関する研究

2月24日

深堀浩樹（論文抄読）

増地あゆみ, 岸玲子: 高齢者の抑うつとその関連要因についての文献的考察—ソーシャルサポートネットワークとの関連を中心に—. *日本公衆衛生学会誌*, 48(6), 435-448, 2001.

日下修一（話題提供）

宇都宮病院の主な問題点と対策・次年度への課題

3月2日

杉浦仁美（論文抄読）

竹村祥恵, 藪川悟, 成瀬優知: A県における公立中学校教員の精神健康調査. *日本社会精神医学雑誌*, 9, 1-10, 2000.

藤本昌樹, 藤倉利光. 中学校教員の精神的健康に関する研究—教員の悩みの構造とGHQの関連から—. *学校メンタルヘルス*, 3, 74-79, 2000.

尾関志保（話題提供）

“Family Meaning”の有用性について—在宅で医療的ケアを要する子どもと家族を例として—

3月9日

細坂泰子（論文抄読）

Parienti, J.J., Thibon, P., Heller, R. Le Roux, Y., von Theobald, P., Bensadoun, H., Bouvet, A., Lemarchand, F., Le Contour, X.: Hand-rubbing with an aqueous alcoholic solution vs traditional surgical hand-scrubbing and 30-day surgical site infection rates—Randomized equivalence study—, *JAMA*, 288(6), 722-727, 2002.

杉浦仁美（研究経過報告）

教師のメンタルヘルスに関する研究計画

3月16日

杉山智子（論文抄読）

de Vugt, M.E., Stevens, F., Lousberg, R., Jaspers, N., Winkers, I., Verhey, F.R.: Do caregiver management strategies influence patient behavior in dementia?, *International Journal of Geriatric Psychiatry*, 19, 85-92, 2004.

松井典子（話題提供）

転倒調査を通して

3月23日（業績報告会）

平成16年度

4月13日

近藤佳代子（論文抄読）

Gilbertson, M.W., Shenton, M.E., Ciszewski, A., Kasai, K., Lasko, N.B., Orr, S.P., Pitman, R.K.: Smaller hippocampal volume predicts pathologic vulnerability to psychological trauma, *Nature Neuroscience*, 5(11), 1242-1247, 2002.

涌水理恵（研究経過報告）

博士論文研究計画～修士論文作成過程の反省を踏まえて～

4月20日

涌水理恵（論文抄読）

Barrera, M.E., Rykov, M.H., Doyle, S.: The effects of interactive music therapy on hospitalized children with cancer: a pilot study, *Psycho-Oncology*, 11, 379-388, 2002.

杉浦仁美（研究経過報告）

教師のメンタルヘルスサポートを阻害する要因探索に関する研究計画

4月27日

岡崎佳織（論文抄読）

Neufelda, S.M., Query, B., Drummond, J.E.: Respite care users who have children with chronic conditions: Are they getting a break?, *Journal of Pediatric Nursing*, 16(4), 2001.

近藤佳代子（研究経過報告）

博士論文研究計画

5月11日

小林京子（論文抄読）

Kazak, A.: Posttraumatic distress in childhood cancer survivors and their parents, *Medical and Pediatric Oncology Supplement*, 1, 60-68, 1998.

5月18日

細坂泰子（論文抄読）

Schwaber, M., Wright, S., Carmeli, Y., Venkataraman, L., DeGirolami, P., Gramatikova, A., Perl, T., Sakoulas, G., Gold, H.: Clinical implications of varying degrees of vancomycin susceptibility in methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* bacteremia, *Emerging Infectious Diseases*, 9(6), 657-664, 2003.

細坂泰子（研究経過報告）

BIVR の疫学調査と生物学的解析

5月25日

細坂泰子（日本化学療法学会予演）

$\beta$ -lactam antibiotic induced VCM-resistant MRSA(BIVR)および MRSA, MSSA に対する  $\beta$ -lactam 薬と VCM の併用効果

杉浦仁美（研究経過報告）

教師のメンタルヘルスサポートを阻害する要因探索に関する研究計画

6月1日

杉浦仁美（論文抄読）

久富 善之：日本の教員文化—その実証的研究—5—教師のバーンアウト（燃え尽き）と「自己犠牲」的教師像の今日的転換，一橋大学社会学研究, 34, 3-42, 1995.

古田正代（研究経過報告）

（仮題）産後の抑うつに関連する因子の探索 — 生後1か月児の気質に焦点を当てて—

6月8日

近藤佳代子（論文抄読）

Tyack, Z.F., Ziviani, J.: What influences the functional outcome of children at 6 months post-burn?, *Burns*, 29, 433-444, 2003.

細坂泰子（研究経過報告）

BIVR の疫学調査と生物学的解析

6月15日

古田正代（研究経過報告）

（仮題）産後の抑うつに関連する因子の探索 — 生後1か月児の気質に焦点を当てて—

杉浦仁美（研究経過報告）

（仮題）教師の相談活動を阻害する要因探索

6月22日

岡崎佳織（論文抄読）

Thyen, U., Kuhlthau, K., Perrin, J.: Employment, child care, and mental health of mothers caring for children assisted by technology, *Pediatrics*, 103(6), 1235-1242, 1999.

小林京子 (研究経過報告)

(仮題) がん(白血病)の子ども 医療者のがんの子どもの捉え方と患児・家族への影響 プリパレーション

6月29日

涌水理恵 (日本小児看護学会予演)

(演題) 外科的小手術を受けた子どもの心理的混乱に関する研究

細坂泰子 (研究経過報告)

BIVRの疫学調査と生物学的解析

7月6日

小林京子 (論文抄読)

Saiki-Craighill, S.: The Children's sentinels: mothers and their relationships with health professionals in the context of Japanese health care, *Social Science and Medicine*, 44(3), 291-300, 1997.

佐藤伊織 (日本家族看護学会予演)

(演題) 小児がんで亡くなった子どものきょうだい—青年期女性の語りに見る悲哀の仕事—

7月13日

日下修一 (論文抄読)

Humeniuk, R., Ali, R., McGregor, C., Darke, S.: Prevalence and correlates of intravenous methadone syrup administration in Adelaide, Australia, *Addiction*, 98, 413-418, 2003.

岡崎佳織 (研究経過報告)

(仮題) 在宅で医療的ケアを行うことになる子どもと家族への退院時の援助

9月7日

岡崎佳織 (論文抄読)

Gibson, C.H.: The process of empowerment in mothers of chronically ill children, *Journal of Advanced Nursing*, 21, 1201-1210, 1995.

杉浦仁美 (研究経過報告)

教師の相談活動を促進する要因探索

9月15日

上野里絵（論文抄読）

Valiakalayil, A., Paulson, L.A., Tibbo, P.: Burden in adolescent children of parents with schizophrenia: The Edmonton High Risk Project, *Soc Psychiatr Epidemiol*, 528-535, 2004.

岡崎佳織（研究経過報告）

在宅療養中の医療的ケアが必要な子どもの主な介護者の不安に影響する要因

9月21日

小林京子（論文抄読）

Varni, J.W., Burwinkle, T.M., Katz, E.R., Meeske, K., Dickinson, P.: The PedsQL™ in pediatric cancer: Reliability and validity of the Pediatric Quality of Life Inventory™ Generic Core Scales, Multidimensional Fatigue Scale, and Cancer Module, *Cancer*, 94(7), 2090-2106, 2002.

古田正代（研究経過報告）

（仮題）生後1ヶ月児における児の行動特徴が母親の抑うつに与える影響について

9月28日

古田正代（論文抄読）

Grace, S.L., Evindar, A., Stewart, D.E.: The effect of postpartum depression on cognitive development and behavior: A review and critical analysis of the literature, *Archives of Women's Mental Health*, 6, 263-274, 2003.

上野里絵（研究経過報告）

（仮題）双極性障害を有する親の青年期の子どもに関する研究

10月5日

杉浦仁美（論文抄読）

Angermeyer, M.C., Matschonger, H., Riedel-Heller, S.G.: Whom to ask for help in case of a mental disorder? Preference of the lay public, *Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology*, 34, 202-210, 1999.

小林京子（研究経過報告）

小児がんのQOL尺度 PedsQL の日本語版の開発

10月12日

涌水理恵（小児保健学会予演）

外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱とその関連要因

涌水理恵（研究経過報告）

(仮題) 外科的小手術を受ける子どもへの Psychological preparation program 介入の有効性の検討

(仮題) 幼児の周手術期ストレスに関する精神神経免疫学的研究

11月16日

涌水理恵 (日本看護科学学会予演)

短期入院し手術を受けた子どもの入院中と退院後の心理的混乱の関係

近藤佳代子 (研究経過報告)

Development and Validation of an instrument measuring quality of life in parent(s) of children with atopic dermatitis

11月30日

涌水理恵 (論文抄読)

Kain, Z.N., Caramico, L.A., Mayes, L.C., Genevro, J.L., Bornstein, M.H., Hofstadter, M.B.: Preoperative preparation programs in children: A comparative examination, *Anesth Analg*, 87, 1249-55, 1998.

杉浦仁美 (研究経過報告)

中学校教師の相談活動を促進する要因探索 ～結果報告～

12月7日

近藤佳代子 (論文抄読)

Lawson, V., Lewis-Jones, M.S., Finlay, A.Y., Reid, P., Owens, R.G.: The family impact of childhood atopic dermatitis: The dermatitis family impact questionnaire, *British Journal of Dermatology*, 138, 107-113, 1998.

陳俊霞 (研究経過報告)

子供の入院に付き添う家族の負担における日中現状

12月14日

細坂泰子 (研究経過報告)

特定病院における  $\beta$ -lactam antibiotic induced vancomycin -resistant MRSA (BIVR) の年次的検出状況と phenotype と genotype を用いた系統的分類方法に関する研究

12月21日

小林京子 (論文抄読)

Eiser, C., Greco, V., Vance, Y.H., Horne, B., Glaser, A.: Perceived discrepancies and their resolution: quality of life in survivors of childhood cancer, *Psychology and Health*, 19, 15-28, 2004.

岡崎佳織 (研究経過報告)

医療的ケアを要する在宅療養児に行った退院援助に関する看護師の認識 一 家族アセスメントに焦点を当てて一

1月11日

岡崎佳織 (論文抄読)

Hewitt, J.: Children who require long-term ventilation: staff education and training, *Intensive and Critical Care nursing*, 20, 93-102, 2004.

涌水理恵 (研究経過報告)

(仮題) 外科的小手術を受ける子どもへの Psychological preparation program 介入の有効性の検討

1月18日

杉浦仁美 (修士論文発表予演)

東京都の中学校教師のメンタルヘルスに関連する要因

古田正代 (修士論文発表予演)

生後1ヵ月の第1子を養育する母親の抑うつ及び関連要因

1月25日

杉浦仁美 (修士論文発表予演)

東京都の中学校教師のメンタルヘルスに関連する要因

古田正代 (修士論文発表予演)

生後1ヵ月の第1子を養育する母親の抑うつ及び関連要因

2月1日

上野里絵 (論文抄読)

Diaz-Caneja, A., Johnson, S.: The views and experiences of severely mentally ill mothers, *Social Psychiatry Psychiatric Epidemiology*, 39, 472-482, 2004.

小林京子 (研究経過報告)

小児急性リンパ性白血病経験者の Quality of Life とその関連要因の探索

2月8日

近藤佳代子 (論文抄読)

Balkrishnan, R., Housman, T.S., Grummer, S., Rapp, S.R., Clarke, J., Feldman, S.R., Fleischer, A.B.: The family impact of atopic dermatitis in children: the role of the parent caregiver, *Pediatric Dermatology*, 20, 5-10, 2003.

上野里絵 (研究経過報告)

精神疾患を有する母親の子育てに関する研究 (仮題)

2月22日

涌水理恵 (論文抄読)

Kain, Z.N., Wang, S.M., Mayes, L.C., Caramico, L.A., Hofstadter, M.B.: Distress during the induction of anesthesia and postoperative behavioral outcomes, *Anesth Analg*, 88, 1042-47, 1999.

松井典子 (話題提供)

研究倫理審査委員会/研究倫理について

3月1日

杉浦仁美 (論文抄読)

田村 修一, 石隈 利紀: 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究 —バーンアウトとの関連に焦点をあてて—. *教育心理学研究*, 49, 438-448, 2001.

尾関志保 (話題提供)

アメリカの疼痛管理を料理する

3月8日

古田正代 (論文抄読)

Beck, C.T.: Teetering on the edge: A substantive theory of postpartum depression, *Nursing Research*, 42(1), 42-48, 1993.

山崎あけみ (話題提供)

サブストラクションとアウトカムモデル

3月15日

上別府圭子 (話題提供)

家族療法の最近の動向—いくつかの看護業務を心理教育として位置づけることによって

#### 4. 家族看護学教室研究会

##### 4-1. 家族看護学研究会

第11回 2003年4月25日

上別府圭子(当教室助教授)

「ミニ版 家族看護学への道」

第12回 2003年5月23日

尾関志保(当教室助手)

「米国の看護学修士課程で学ぶ」

第13回 2003年6月27日

山本則子(TBI リハビリテーションセンター研究員, 千葉大学共同研究推進センター客員教授, 埼玉医科大学総合医療センター訪問看護ステーション(非常勤))

「質的研究の方法—グラウンデッドセオリー法を中心に」

第14回 2003年9月22日

山下仁(筑波技術短期大学)

「リスクマネジメントについて」

第15回 2003年10月31日

山崎あけみ(当教室講師)

「初めての子どもを迎える女性とパートナーの生活・睡眠—覚醒リズムの同調について」

第16回 2004年11月28日

飯田恭子(東京都立保健科学大学教授)

「効果的・系統的看護英文文献の読解法と作成法の基礎」

第17回 2004年1月30日

特殊非営利活動法人医学中央雑誌刊行会

「医中誌 Web の使い方」

第18回 2004年2月27日

池田智子(当教室大学院博士課程)

「中小企業労働者の職業性ストレスについて」

第19回 2004年3月19日

吉田敬子(九州大学医学部精神科講師)

「周産期精神医学—臨床に貢献する研究・デザインの組み方と手法—」

第20回 2004年5月21日

小林奈美(鹿児島大学医学部保健学科地域看護学・看護情報学講座助教授)

カルガリー大学家族看護ユニットへの研究留学成果報告

第21回 2004年7月2日

大谷尚子(茨城大学教育学部教授/家族看護学教室客員研究員)

「養護教諭を取り巻く現状と課題～養護教諭の専門性を問われるなかで～」

第22回 2004年9月24日

河原宣子(三重県立看護大学看護学部講師/当教室研究生)

「高齢・過疎化の進行する地域における在宅療養者の家族が意識する家族認知の範囲及び訪問看護師の役割」

第23回 2004年12月3日

鳥居央子(北里大学看護学部地域看護学教授)

「家族看護と看護職」

第24回 2005年3月1日

細坂泰子(当教室大学院博士課程)

「5年間の学生生活を振り返ってー母性と感染ー」

#### 4-2. 家族ケア症例研究会

第1回 2003年9月19日

水口裕美（大学付属病院小児外来看護師）

母子ともにモチベーションの低い糖尿病の小学6年生女兒例

第2回 2003年11月21日

益田 凡（東京大学医学部附属病院入院棟A12階北看護師）

腹膜透析導入になった介護度の高い高齢男性の退院支援について～家族や訪問看護等との関わりを通して～

第3回 2004年2月20日

山崎知克（東京都立大塚病院小児科医師）

重症心身障害児の在宅ケアと医療連携の症例

第4回 2004年5月28日

佐々木敦（東京大学医学部附属病院小児科心理室臨床心理士）

妹出生を契機に心因反応を呈した4歳男児の症例

第5回 2004年10月22日

小林京子（当教室修士課程1年）

一卵性双生児間の骨髄移植と死の看護を通じて

第6回 2004年12月14日

頭川典子（埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科助手）

子ども虐待予防の自助グループに参加していた母親の事例

第7回 2005年3月18日

恩田清美（三重大学大学院医学系研究科修士課程小児看護学専攻）

在宅に悔いを残した思春期初発の脳腫瘍症例の家族の事例

## 5. 家族ケアフォーラム

第1回 平成15年7月22日(火) 13:30~16:30

テーマ：病気の子どもを育てる家族のケア ～多職種の視点～

講演者：戸邊さえ子 (東京大学医学部附属病院入院棟A2階北看護師長)  
星 順隆 (東京慈恵会医科大学輸血部教授, 小児科兼任教授)  
亀口憲治 (東京大学大学院教育学研究科教授, 学校臨床総合教育研究センター附属学校分室長および心理教育相談室長)  
上別府圭子 (東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野助教授)

基調講演「子どもの病と家族」, 「病気の子どもを育てる家族のケア」をテーマとしたシンポジウムを開催。看護師, 医師, 臨床心理士といった複数の職種の視点から活発なディスカッションが行われた。看護師, 臨床心理士, 保育士, 院内学級教師, 大学教員, 学生など46名が参加。

第2回 平成16年7月9日(金) 13:30~16:30

テーマ：病児のきょうだいを支援する

講演者：岩田 力 (東京大学大学院医学系研究科生殖発達加齢医学専攻小児医学講座発達発育学助教授)  
柘植美恵 (東京大学医学部附属病院入院棟A3階南NICU主任副看護師長)  
池田文子 (財団法人がんと子供を守る会ソーシャルワーカー)  
岩崎美和 (東京大学医学部附属病院入院棟A2階北副看護師長)  
上別府圭子 (東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野助教授)

「病児のきょうだいを支援する」をテーマに, 第1回と同様, 多職種のシンポジスト, 指定討論者を迎えてシンポジウムを開催。医師, 看護師, ソーシャルワーカーの視点からの講演, 指定討論に続き, きょうだいの支援について意見交換や提案が行われた。看護師, 保健師, 臨床心理士, 保育士, 大学教員, 学生など45名が参加。

## 6. 教室の沿革

- 2003.4.1 小林奈美助手が研究休職，カルガリー大学看護学部ポストドクトラルフェローとなる。尾関志保氏（前日本赤十字社医療センター看護師）が助手として発令される。常勤スタッフは助教授 1（上別府圭子），助手 2（松井典子，尾関志保），技術官 1（秋山照男）の計 4 名。非常勤講師として清水敬生氏（国際医療福祉大学教授，山王メディカルプラザ女性腫瘍内分泌センター長），星順隆氏（東京慈恵会医科大学輸血部教授，小児科兼任教授）が発令され、非常勤講師 5（鳥居央子先生，渡辺裕子先生，法橋尚宏先生，清水敬生先生，星順隆先生），大学院博士課程 5（池田智子，杉山智子，細坂泰子，深堀浩樹，ペ ススキ），修士課程 4（涌水理恵，松本和史，古田正代，杉浦仁美），客員研究員 9（大谷尚子，西岡光世，山下仁，内藤直子，剣物（工藤）祐子，大嶺ふじ子，北野（下平）和代，渡邊久美，河田みどり），研究生 3（浅香知子，日下修一，河原宣子），卒論生 2（佐々木彩子，佐藤伊織）。
- 2003.5.1 事務補佐員として，浅野万里子氏を迎える。
- 2003.6.3 杉下知子前教授が名誉教授の称号を授与される。  
平成 15 年度家族看護学教室スタッフ会議を開催。
- 2003.7.22 第 1 回家族ケアフォーラムを開催。テーマ「病気の子どもを育てる家族のケア～多職種の見点～」。
- 2003.10.1 山崎あけみ氏（前米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部博士課程，京都府立医科大学医療技術短期大学部非常勤講師）が当教室の講師として発令される。常勤スタッフは助教授 1（上別府圭子），講師 1（山崎あけみ），助手 2（松井典子，尾関志保），技術官 1（秋山照男）の計 5 名となる。
- 2004.4.1 常勤スタッフは助教授 1（上別府圭子），講師 1（山崎あけみ），助手 2（松井典子，尾関志保），技術官 1（秋山照男）の計 5 名，小林奈美助手は研究休職中。非常勤講師 4（鳥居央子先生，法橋尚宏先生，清水敬生先生，星順隆先生），大学院博士課程 3（細坂泰子，涌水理恵，近藤佳代子），修士課程 4（古田正代，杉浦仁美，佐藤伊織（休学），岡崎佳織，小林京子），客員研究員 8（大谷尚子，内藤直子，大嶺ふじ子，北野（下平）和代，渡邊久美，河田みどり，池田智子，松本和史），研究生 2（日下修一，河原宣子）。
- 2004.5.1 小林奈美助手が研究休職を終了し，鹿児島大学医学部保健学科地域看護学・看護情報学助教授に就任する。
- 2004.6.4 平成 16 年度家族看護学教室スタッフ会議を開催。
- 2004.7.9 第 2 回家族ケアフォーラムを開催。テーマ「病児のきょうだいを支援する」。
- 2004.10.1 修士課程大学院生として上野里絵氏，外国人研究生として陳俊霞氏を迎える。
- 2005.3.31 尾関志保助手が退職し，（社）日本赤十字社医療センターに転出する。

## 7. 資料（卒論・修論・博論要旨）

### 卒業論文内容要旨

論文題目： きょうだいを小児がんでなくした青年期女性の語りに見る悲哀の仕事  
～母子関係ときょうだい関係に注目して～

指導教官： 上別府 圭子 助教授

東京大学医学部健康科学・看護学科

平成 14 年度進学

佐藤 伊織

### 緒言

愛するものの喪失を、人はすぐに受け入れられるものではない。喪に服し、故人の思い出を語りあいながら、新たな人間関係を築いていくことで、喪失の現実を徐々に認識し、生きるエネルギーを取り戻していく。この作業を悲哀の仕事（mourning work）と言い、ときには年単位の時間をかけて行う、遺族にとって大切な働きである。これには、何らかの望ましい手順があるわけではないため、遺族に対する援助は操作的であってはならず、その語りに関心を寄せて一緒に物語を紡いでいくことが必要である。そのためには、援助者はさまざまな悲哀の仕事やその特徴を知らなくてはならないだろう。

子どもの死が家族に与える影響は大きい。しかし、子どもの死における家族への援助では両親に焦点が当てられることが多く、きょうだいへの対応に関する研究は少ない。そこで本研究は、きょうだいを小児がんで失った青年の体験の語りから、彼らの悲哀の仕事の特徴を描き出すことを目的として実施した。

### 方法

都内 A 病院における小児がんの患児をもつ家族の会に参加する、5 年から 15 年前に小児がんで亡くなった患児の母親及びきょうだいに対して、当時の患児の主治医を通じて研究の目的について伝え、協力を求めた。承諾の得られたきょうだい 3 名に対して、文書による同意を得、2003 年 9 月～11 月に面接を行った。面接は対象者が選択したプライバシーの守られる場所で行った。面接時間は 80 分から 120 分であった。倫理的配慮として、面接には、患児の闘病中から直接あるいは間接的に母親やきょうだいと関わりを持っていた者が同席し、面接による心理的影響に対してじゅうぶんな配慮に努めた。

面接では、発症前からこれまでのきょうだい・家族・自分・病気・生・死に関する認識や感情の変化について語ることを依頼し、録音して逐語録を作成した。そこから悲哀の仕事の語りを再構成し、きょうだいとの死別による悲哀の仕事において特徴的と思われる点を抽出した。

### 結果

協力の得られた事例は 3 例で、いずれも 20 歳代の女性であった。

死別当時 9 歳だった事例 I では、母親が兄との死別後悲嘆にくれて閉じこもりがちになった。幼かったこともあって、なぜ母親が自分のほうを向いてくれないのかわからなかった。母親に拒絶されたと感じ、母親との距離が離れたことが何よりの苦痛であったため、兄との死別のことを考える余裕は全くなかった。1 年後、母親から詳しい事情を説明されて、母親に拒絶されたと感じてつらかった体験を仕方ないことだと思えるようになった。母親との距離は近づき、兄との死別について考えることもできるようになった。その後、悲しんだり、何もできなかったことを悔いたりしつつ、悲哀の仕事を行っていき、今では、兄の死は単に悲しいだけのできごとではな

く、さまざまなものを得た体験だったと回想する。また兄について、死別時の兄より年上になった今でも超えられない面があると思うほど精神的に大人だったと述べている。

死別当時 14 歳だった事例 II では、妹との死別後、母親の強い嘆きに接して、家族を自分が支えなくてはならないと意識し、普通に振舞うことで家族を支えようとした。泣く姿を見せないために、家族が思い出話をしているときにも涙が出てこないよう必死でこらえ、母親が妹に関する話題を出した際にも意識的に別の話題に変えていた。次第に母親も妹の話題を自分には振らなくなった。一方、7 歳も年下の妹を生前煩わしいと思っていたため、何もしてあげなかったことによる罪責感が今も非常に強く、職業として妹が望んでいた医療福祉職を選択し、現在そこで償いを行っている。

死別当時 24 歳だった事例 III では、妹との死別後、悲しみをこらえて仕事を続けている母親のために自分もしっかりしなければならぬと思った。自分と一緒にいるときの母親が嬉しそうであり、それは自分が母親にとっての世話をすることができる対象だからではないかと考え、もっと母親に「娘」を感じさせたいと思った。一方妹に対しては、8 年間という長い闘病期間中からできるかぎりのケアを行ったのと同じように、死別後も、妹のためになにかできないかと考えており、同じ血が流れている自分のできることとして子どもを産みたいと述べている。しかし、今でも、妹の思い出を振り返ろうとすることはない。

以上の 3 つの語りから、「死別対象であるきょうだいとの関係に基づいた悲哀の仕事」と「悲哀の仕事に影響する母子関係」とが抽出された。各事例の悲哀の仕事の進行の程度を見ると、事例 I では、母親に拒絶されているように感じている間はきょうだいのことを考える余裕がなかったが、母親との距離が近づいてから再びきょうだいとの関係を築いていき、現時点で死別を受容していた。事例 II では、母親を支えるつもりでかえって母親と疎遠になってしまった一方で、医療福祉職に就いて償いを始め、悲哀の仕事を行っている最中であった。事例 III では、死別後もずっと前向きでいようとする母親のためにきょうだいのぶんまで「娘」を感じさせたいと思い、そのために自身も前向きであろうとして妹との思い出を振り返ることなく経過しており、まだ悲哀の仕事は始まっていなかった。

#### 考察

体験への肯定的な意味づけ・強い罪責感・躁防衛といった、がんで子どもを失った母親に見られる反応が、きょうだいとの死別による悲哀の仕事の語りの中にも見られた。これらは死別対象であるきょうだいとの関係から生じてくるものと考えられる。

本研究より、死別対象との関係のみならず、母子関係に強く影響されるということが、きょうだいとの死別による悲哀の仕事の特徴であるということが明らかになった。また、きょうだいとの死別による悲哀の仕事は、死別後すぐに始まらないことがあり、これも母子関係に強く影響された結果であるということが明らかになった。たとえば、母親に拒絶されているように感じていた事例 I では、母親との安心できる関係が得られて初めて悲哀の仕事を行い始めることができた。また、母親を支えるつもりでかえって母親と悲哀の仕事とを共有できなかった事例 II では、母子関係の外に悲哀の仕事を進められる場所を選択し、そこで悲哀の仕事を行い始めたところであった。さらに、母親に対してきょうだいのぶんまで「娘」役割をとることを自らの悲哀の仕事よりも優先させた事例 III では、悲哀の仕事は現在ではなく未来の課題として将来に託していた。

本研究より示唆されたきょうだいの悲哀の仕事の特徴より、遺族に接する者は、家族を個の集合ではなく全体でひとつのシステムとしてとらえる視点を持ち、中でもきょうだい・死別した児・母親という 3 者のサブシステムに注目して、援助を行う必要があると考えられる。また、子どもが亡くなった場合には、母親は自らの悲哀の仕事に向き合わなくてはならず、きょうだいのケアまでも母親に任せることはできないので、援助者が直接母親やきょうだいに関わることや、あるいは周囲の大人や社会資源に働きかけることで、母親ときょうだいの悲哀の仕事の援助する必要がある。

## 卒業論文内容要旨

論文題目：男性保健師が性別と関係づけて認識している職業上の経験に関する研究

指導教官：上別府圭子助教授

東京大学医学部健康科学・看護学科

平成 14 年度編入学

氏名 佐々木彩子

### 目的

我が国では長年の間、「看護は女性の職業」という社会的固定観念があった。しかし、2002年に保健婦助産婦看護婦法が改正され、保健師助産師看護師法が施行されたことからわかるように、男性看護職をめぐる環境は近年変化している。このような状況の中、ジェンダーの視点から男性看護職に焦点をあてた調査研究も見られるようになってきているが、過去に行われた調査研究では、看護師のみを対象としていて保健師を対象としたものはほとんど行われていない。

保健師として男性が参画するようになり10年経過し、男性保健師の現状を把握することは、これからの保健師活動を展開する上で重要だと考えた。そこで、男性保健師が男性であることと関係づけて認識している経験と、経験が保健師として働くことにどのように影響を及ぼしているかを探求することを目的として、本研究を行った。

### 方法

対象は、現職の男性保健師、または過去に保健師として就業していた男性保健師で、データ収集は2003年11、12月に、半構造化インタビューによって行った。インタビュー内容は対象者の許可を得て、その場で録音し、逐語録を作成した。分析は、修正ストラウス・グレーザー版グラウンデッドセオリーアプローチを参考に実施した。

### 結果

対象は9名の男性保健師であった。内訳は、8名が現職の保健師、1名が過去に就業経験をもつ保健師で、年齢は26～41歳（平均年齢31.8歳）であった。保健師経験年数は満1～8年（平均4.5年）で、勤務地は、7名が首都圏、2名が首都圏以外の保健所または保健センターであった。

分析の結果、《男性保健師の職業上の経験》《男性保健師の心理プロセス》《職業継続支持》の3つのカテゴリーが認められた。

《男性保健師の職業上の経験》は男性保健師が性別と関係づけて認識している職業上の経験を示すカテゴリーである。〈業務遂行上の問題〉は男性保健師が男性であることが業務に負の影響を与えていると認識している経験であり、母子・女性を対象とする場面や、家庭訪問や電話相談業務において経験していた。また、男性であることが業務に優位に影響していると認識している経験である〈業務遂行上のアドバンテージ〉、その他には〈職場における人間関係形成・コミュニケーション〉に関する経験が語られた。男性保健師は、〈業務遂行上の問題〉に直面したときに〈問題への対処的・予防的行動〉をとりながら業務を継続させていく。その結果、住民の男性保健師に対する認知が高まることや肯定的な自己評価・他者評価といった〈業務遂行継続の産物〉を得ることによって、〈業務へのかかわり方の確立〉をし、〈将来の期待・模索〉を見出すようになることが示された。

《男性保健師の心理プロセス》は、男性保健師が、“男性である自分”と“保健師として働く自分”をどのように受け止めているかを示す心理プロセスである。男性である自分がどのように保健師業務を遂行すればよいのかという〈男性保健師としての苦難感〉、保健師として働くことに自信をつけた状態である〈男性保健師としての自信〉から、最終的に男性保健師が保健師として働いていく上で男性であることの位置づけができている状態である〈保健師として自然体でいられること〉の3段階で推

移が見られた。

《職業継続支持》は、男性保健師が職業を続けていくことを助けるもので、パイオニア精神ややるしかないといった〈モチベーション〉、同僚からの協力の獲得や男性保健師同士のピアサポートである〈サポートの享受〉、保健師としての専門性を職業継続に伴い徐々に身に付けて高めていくことを表す〈学習・経験の積み重ね〉の3概念を含む。

また、《職業継続支持》は《男性保健師の職業上の経験》の展開を支えるものとして影響しており、《男性保健師の職業上の経験》の展開に伴って、《男性保健師の心理プロセス》の推移が見られた。特に、〈男性保健師としての自信〉には、〈業務遂行上のアドバンテージ〉および〈業務遂行継続の産物〉が影響を及ぼしていた。(図)

### 考察

今回の分析結果において、男性保健師が業務遂行上の問題に直面するのは、対象が母子や女性で、業務形態が家庭訪問、電話相談の場合であることが分かった。対象が母子・女性である時に男性看護職が困難を抱えるという結果は男性看護師を対象とした先行研究と同様の結果であり、男性看護職全体が抱えやすい問題と言える。しかし今回、家庭訪問、電話相談において男性保健師が業務遂行上の問題を抱えやすいということが明らかになり、これは病院看護師とは異なる保健師特有の業務形態における経験であると考えられる。

《男性保健師の心理プロセス》が推移する過程には、〈業務遂行上のアドバンテージ〉および〈業務遂行継続の産物〉が影響を及ぼしていた。〈業務遂行継続の産物〉は、業務を継続させることにより問題に対処できるようになったり、保健師としての〈学習・経験の積み重ね〉により得られるものであった。つまり男性保健師が、保健師として自然体でいられるためにも、高い専門性を身につけていく体験が重要と思われた。

この他、職業継続を支持するものとして得られた〈サポートの享受〉の中には、女性の同僚からの協力の獲得と男性保健師同士のピアサポートに関する経験が表出された。同僚の協力を得ることは業務遂行継続の上で必要であるが、同僚の圧倒的多数が女性であるため、同僚から協力を得るということは、すなわち女性から協力を得ることだといえる。また、男性保健師として同様の経験をしている男性保健師同士のピアサポートも重要な役割を果たしていた。女性保健師が男性保健師についての理解を深めることや男性保健師同士のつながりができることが期待される。

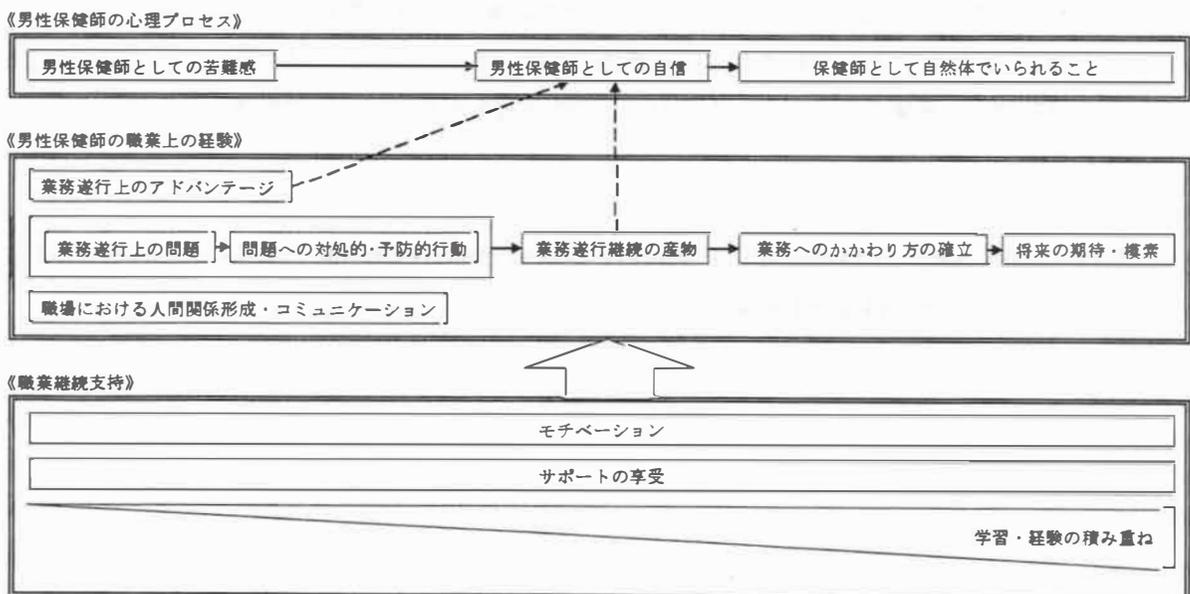


図 各概念間・カテゴリー間の関係

外科的小手術を受ける子どもの心理的混乱およびその関連要因

Psychological Upset and Its Correlated Factors in Children Undergoing Minor Surgery

16117 涌水理恵

Rie Wakimizu

指導教官：上別府圭子 助教授

Tutor : A. Prof. K. Kamibeppu

健康科学・看護学専攻 平成13年4月入学

Admission of School of Health Sciences  
and Nursing in April, 2001

外科的小手術(以下、小手術)を受ける子どもの入院中と退院後の心理的混乱の実態を把握し、それぞれの関連要因を探索するため、G県内A総合病院にて小手術を受ける4~7歳の子どもとその母親24組を対象に、入院1週間前から退院1週間後にかけて、質問紙調査・観察調査・面接調査を実施した。

その結果、①入院中の心理的混乱は、入院時・分離時・帰室時・回復時で、退院時に比べて有意に高いこと、②退院後の心理的混乱として54.2%に「夜泣き」「痲癩」「自立性の欠如」などの退行行動が見られること、③入院中の心理的混乱には、「発症からの期間」「親からの手術説明」「病気に対する自覚」「体質的不安定」が関連していること、④退院後の心理的混乱には、「入院の趣旨に対する理解」「病気に対する自覚」「服従的な親子関係」「医療者から受けた手術説明に対する理解」が関連していること、⑤入院中と退院後の心理的混乱には高い相関があることが、明らかになった。

以上の結果より、小手術を受ける子どもへの術前の心理的準備のあり方として、病気・入院・手術に対する子どもなりの自覚や理解を、医療者と家族が協働して促していくことの必要性が示唆された。また、「発症からの期間」「子どもの体質傾向」「親子関係」について事前にアセスメントを行い、個別に注意を払うことの必要性が示唆された。さらに、退院後の心理的混乱を予防する意味でも、医療者は子どもの入院中、心理的混乱を高めないように配慮・工夫することが望まれた。

Key words: hospitalization, minor surgery, parent-child relations, psychological preparation, psychological upset

悪性腫瘍の早期臨床試験における看護師の困難感に関する質的研究

Qualitative study on nurses' difficulties with early anti-cancer clinical trials

26701 松本 和史

Kazufumi Matsumoto

指導教官：上別府 圭子 助教授

Tutor: A. Prof. K. Kamibepu

健康科学・看護学専攻 平成 14 年 4 月入学

Admission to School of Health Sciences

and Nursing in April, 2002

本研究の目的は、抗悪性腫瘍治療の早期臨床試験に関わる看護スタッフが、早期臨床試験を行う上で感じる困難感を質的に明らかにすることである。抗悪性腫瘍治療の早期臨床試験が行われている都内 2 ヶ所の病院に勤務する看護スタッフ 21 名を対象に、半構造化インタビューを行い、グラウンデッドセオリー法における継続的比較分析法を参考に質的に分析を行った。その結果、3 つの困難感が抽出された。「患者へのケアにおける困難」では、早期臨床試験の経過中の患者へケアを提供する上で生じる困難が語られ、方略として開始時から終了後まで継続的な視点からのケアの提供が必要であることが示唆された。「科学性を保つ上での困難」では、研究としての早期臨床試験を科学的に適切に実施する目的で行う看護業務に関する困難が語られた。これは従来、コーディネーターが行い、看護スタッフには求められていなかった業務に関する困難であり、方略として臨床試験に関する知識だけでなく幅広い医学知識が必要であることが示唆された。「医療チームとしての協働における困難」では、早期臨床試験を遂行する上で必要な医師、コーディネーターからなる医療チームと協働を図る上で生じる困難が語られた。特に看護スタッフには、コーディネーターの役割が未確立、不明確なことによる困難が生じており、コーディネーターの役割を明確にし周知させる必要が示唆された。早期臨床試験に関わる看護スタッフが経験する困難は、早期臨床試験の特異な状況から生じており、看護スタッフは他領域の看護にはない特異的な困難を経験していた。

Key words: advanced cancer, early clinical trials, nurses' difficulty, nurse's role, qualitative research

## 論文の内容の要旨

論文題目 The associated factors of depression among workers  
at small or medium sized enterprises in Japan  
和訳 日本の中小企業労働者における抑うつに関連要因

指導教官 上別府圭子 助教授

東京大学大学院医学系研究科  
平成 13 年 4 月 1 日進学  
博士後期課程  
健康科学・看護学専攻

氏名 池田 智子

### 1. はじめに

近年の疫学研究から、仕事のストレスは各種疾病の発症リスクを高めることが明らかになり、ストレス対策に重点を置いた労働衛生行政が実施されるようになった。しかしわが国の約 99% を占める中小企業においては、その実態を捉えた研究が少ないため、対策は極めて立ち遅れている。

日本ではこれまで、欧米にて開発された職業性ストレス尺度の日本語版の活用により、仕事のストレスと健康影響をとらえる研究が蓄積されてきた。しかし、統一した知見が得られていない。その理由の一つとして、日本企業の職場特性を考慮していないことが考えられる。

<日本の中小製造企業の職場特性>

現場作業を通して必要な技能を伝承していく On the job training (OJT) を基本とする。このため企業内の人間関係が、経営に直結する重要性をもつ。また、経営者との強力な縁故関係の存在が多く、縁故関係者は、繁閑に応じた弾力的労働力提供、企業内の人間関係調整の拠点という独特の役割を果たしている。OJT や縁故関係者の活用を通し、経営は極めて家族主義的である。

<研究目的>

日本の中小企業労働者に具体的なストレス対策を講じることを最終目的とし、本研究では、抑う

つの関連要因を、労働者全体、経営者と縁故関係のない一般従業員、経営者とその家族従業員の3群について、男女別に説明する。

<研究の構成>

研究① O 区の中小企業労働者へのフォーカスグループインタビューと個人面接を実施し、質的分析により、ストレス関連要因を抽出した。

研究② 研究1より得られた結果を用い、NIOSHの職業性ストレス理論に基づいた中小製造業労働者のストレス分析枠組みと調査票を作成し、Y市を対象に調査を実施した。

仮説① 人間関係が経営に直結する重要性をもつという中小企業の特徴から、男女とも、抑うつを高める要因として、「対人葛藤」が強く関連している。

仮説② 「経営者または経営者の家族」の女性は、中小企業においては多様な役割を果たしていると考え、仕事の「量的負荷」と「対人葛藤」が抑うつを高める強い要因となっている。

以下、研究②について述べる。

2. 方法

<調査期間・対象>

2002年8月から12月に自記式調査票を配票留置法により実施した。配布・回収とも訪問による。

2000年Y市商工名鑑より、市内に存在する事業場を、業種別存在構成に合わせて約15%無作為抽出し、248事業場の3,514人を対象とした。そのうち同意の得られた2,591人に調査票を配布し2,302人より回答が得られた(回収/配布率=88.85%)。1事業場の平均従業員数は14.11人(最頻値3人)であった。対象者の基本的属性は表1のとおりである。

【表1】対象者の基本的属性

	男性(N=1,516)		女性(N=738)		p
	n	%	n	%	
年齢	Mean=44.91	SD=13.53	Mean=45.45	SD=13.73	0.382
勤続年数	Mean=16.37	SD=13.41	Mean=11.53	SD=10.38	0.000
職種					
事務/管理	251	18.19	321	49.84	0.000
生産現場	875	63.41	291	45.19	
その他	254	18.4	32	4.97	
婚姻状況					
既婚	1003	69.08	488	68.35	0.000
未婚	385	26.52	141	19.75	
離婚・死別	64	4.41	85	11.90	
学歴					
中学	361	24.78	152	21.56	0.000
高校	647	44.41	383	54.33	
専門	182	12.49	132	18.72	
大学・大学院	267	18.33	38	5.39	
暮らし向き					
とても厳しい	198	13.54	96	13.56	0.105
厳しい	487	33.31	189	26.69	
ふつう	671	45.90	362	51.13	
ゆとりあり	91	6.22	48	6.78	
とてもゆとりあり	15	1.03	13	1.84	
社内に家族あり	343	22.91	204	28.02	0.027
社内に同年代の仲間あり	1062	70.61	562	76.78	0.007
経営者との関係					
本人	254	17.13	83	11.48	0.000
家族	186	12.54	164	22.68	
親戚	67	4.52	28	3.87	
本人でも家族でも親戚でもない	976	65.81	448	61.96	

<尺度>

抑うつをストレス反応とし、CES-D20 項目を用いた。説明変数には、研究 1 より得られた 15 項目に基づき、個人的要因、仕事のストレス、中小企業のストレス、家庭関連要因、緩衝要因を設定した。NIOSH の職業性ストレス理論を元に作成された日本語版 GJSQ の代用以外に独自に加えた項目は、「暮し向き」「同年代の仲間の有無」「経営者との縁故関係」「会社の将来の曖昧さ」「健康に対する周囲の無理解」「仕事-家庭葛藤」（仕事領域から家庭領域へのストレスの流出）「家庭-仕事葛藤」（家庭領域から仕事領域へのストレスの流出）である。

<分析>

GJSQ 尺度の各得点を、全国の労働者 25,143 人の得点と比較した。基本的属性による抑うつの検討のために、T 検定および ANOVA を行った。抑うつの関連要因については、労働者全体、経営者との縁故関係のない一般従業員、経営者またはその家族従業員の 3 群を男女別に、重回帰分析により分析した。統計パッケージ JMP5.0 を使用した。

3. 結果

全国の労働者に比べて、男女とも「抑うつ」「対人葛藤」の高い値を示した。属性による抑うつの検定結果は、男女とも「34 歳未満」「独身者」に抑うつの高い傾向が見られた。男性ではその他に、「勤続年数の短い人」「暮し向きの厳しい人」が、有意に抑うつの高い状態にあった。

労働者全体の重回帰分析結果を表 2 に示す。男女とも「量的負荷」「仕事の将来の曖昧さ」「対人葛藤」「健康に対する周囲の無理解」が抑うつに強く関連しており、仮説①が支持された。Karasek や NIOSH の理論による仕事の内容（要求度、裁量権）のうちでは「量的負荷」のみしか関連を示さなかった。なお一般従業員群は、労働者全体群とほぼ同様の傾向を示した。

男性のみに、「仕事-家庭葛藤」「家庭-仕事葛藤」が抑うつを高め、「既婚」「家族の社会的支援」が抑うつを低める傾向が認められた。

女性では、家庭に関する項目は、抑うつに対してどのような関連も示さず、「職場の社会的支援」が、低い抑うつとの関連を示した。また、「経営者あるいはその家族」という立場が抑うつを高める傾向が認められ、この立場の女性群の分析では、「量的負荷」と「対人葛藤」が、高い抑うつとの有意な関連を示し、仮説②が支持された。

【表 2】小規模事業場男女労働者の抑うつに関連する要因（有意な関連の認められたもの）

		男性 (N=1,516)			女性 (N=738)		
		$\beta$	SE	p	$\beta$	SE	p
個人的要因	年齢				-0.11	0.03	0.026
	暮らし向き	-0.08	0.26	0.005			
仕事のストレス	婚姻状況	-0.12	0.54	0.000			
	量的負荷	0.08	0.06	0.009	0.13	0.09	0.004
	認知的要求				-0.10	0.13	0.024
	技能の低活用	0.07	0.08	0.015			
	仕事の将来の曖昧さ	0.08	0.06	0.005	0.11	0.08	0.008
緩衝要因	対人葛藤	0.13	0.05	0.000	0.11	0.07	0.012
	職場の社会的支援				-0.15	0.05	0.002
小規模事業場のストレス	家族の社会的支援	-0.07	0.06	0.011			
	経営者との家族関係（本人または家族=1）				0.10	0.75	0.030
	健康に対する周囲の無理解	0.28	0.12	0.000	0.29	0.19	0.000
家庭関連要因	仕事→家庭葛藤	0.14	0.19	0.000			
	家庭→仕事葛藤	0.08	0.22	0.002			

重回帰分析

#### 4. 考察

中小企業労働者のストレスの実態をとらえた研究は、これまでに探した限り見つからないが、一般的に「家族主義的経営のため、大企業労働者に比べてストレスを抱える従業員が少ないのではないか」といわれてきた。しかし本研究結果より、全国データに比べて男女とも抑うつ傾向や、対人葛藤の高い状態が明らかになり、対策を講じる必要性が示された。

男女とも若年層、独身者に抑うつ状態が多い傾向が見られた。近年の若年労働者の、労働と生活に対する意識の変化の他、伝統を重視する職場環境に参入する時点での、能力的あるいは意識的な不適應も考えられる。

男女ともに抑うつと強い関連が見られたのは、「量的負荷」「仕事の将来の曖昧さ」「対人葛藤」「健康に対する周囲の無理解」であった。

「量的負荷」「仕事の将来の曖昧さ」は、近年の不況による、取引先大企業からの短期納入やコストダウン等の厳しい要求や、リストラに伴う労働力減少、将来展望困難な状況からくるものと考えられる。「対人葛藤」は、閉鎖的・固定的かつ、経営に直結する重要性をもつ中小企業独特の人間関係から起こるものと考えられる。「健康に対する周囲の無理解」は、技能と共に伝承されてきた、仕事に対する厳しい姿勢や職場文化の反映と、病気が失職に直結するために体調不良を表明できない状況の2面性を反映していると考えられる。

企業の経営状況に応じて、労働負荷が、経営者またはその家族従業員の立場の女性に多くかかるようになるのは、中小企業の特徴といえる。さらにこの立場の女性は、職場内の複雑な人間関係を調整する役割も担っているために、「量的負荷」と「対人葛藤」が抑うつを高めていると考える。

#### 5. 中小企業のストレス対策

本研究の結果より導き出される中小企業労働者へのストレス対策を考える。まず、「健康に対する周囲の無理解」が、一般従業員のみならず、経営者または経営者の家族の抑うつも高める要因となっていたことから、「健康を重視する新たな職場文化」の構築が必要であると考え。また、経営者またはその家族の立場の女性従業員に対して、家業に対する伝統的姿勢や、性別役割を求める意識が内在していないか考え直し、職場で支援していく必要もある。以上の2点は、職場の労働者全体で取り組むことが重要な課題であるといえる。

職場外からの健康支援については、まず、現在行われている「健康診断の後の事後フォロー」という形を見直したいと考える。本研究の対象者は、診断されることが失職に直結するために、健康診断や受診を避ける傾向がある。そのため、人生全体を考慮した長期的関わりの方が有効であると考え。さらに、閉鎖的な人間関係や、独特の健康軽視の職場文化を打開するためには、個々の企業内で閉鎖的に伝承されている技能を、地域や国が評価、保護、保障していくことも必要ではないかと考える。健康のみならず、技能伝承との両立を目指さなければならないためである。

#### 6. 結論

中小企業労働者における抑うつの関連要因は、組織的特徴や経済的困難さを反映しており、男女差のある要因も明らかになった。企業内の労働者が取り組むべき対策と、企業外からの健康支援の両面から、具体的示唆が得られた。

本研究は東京大学医学部倫理審査委員会の承認を得ている。

生後1カ月の第1子を養育する母親の抑うつ及び関連要因  
**Factors Related to Postpartum Depression of First-Time Mothers at 1 Month  
after Delivery**

26033 古田 正代

Masayo Furuta

指導教員： 上別府 圭子 助教授

Tutor: A. Prof. K. Kamibeppu

健康科学・看護学専攻平成14年4月入学

Admission to Division of Health Sciences  
and Nursing in April, 2001

目的：生後1カ月の健常児の涕泣の実態を把握すること、及び精神疾患の発症モデルである素因ストレスモデルを概念枠組みとして産後うつ病の関連要因を検討することを目的とした。

方法：都内A病院に1カ月児健康診査の受診目的で来院した初産婦122名を対象に無記名の質問紙に沿い、面接調査を実施した。本研究における産後うつ病の判定は、日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票 (Edinburgh Postnatal Depression Scale: EPDS) を用いた。

結果：分析対象となった104名 (有効回答率85.2%) のうち、49名 (47.1%) が過去1週間において持続する涕泣を経験していた。1日あたりの持続した涕泣の合計時間は $133.6 \pm 165.6$ 分、発生頻度は $1.2 \pm 1.2$ 回で、こうした涕泣を毎日3時間以上経験している初産婦は、全対象者のうち16名 (15.4%) であった。涕泣が生じる時間帯は、18時から0時が20名と最も多く、最も少なかった時間帯は6時から12時の6名であった。また、産後うつ病と判定された初産婦は30名 (28.8%) であり、ロジスティック回帰分析により産後うつ病の関連要因を探索したところ、暮らし向きにゆとりがない ( $p < 0.01$ )、パートナーからの援助満足度が低い ( $p < 0.05$ )、持続する涕泣を経験している ( $p < 0.05$ ) の3項目に関連がみられた。

結論：わが国でも海外同様、持続する涕泣を経験している母親の存在が明らかとなった。また、持続する涕泣の経験は、産後うつ病と関連がみられたことから、今後持続する涕泣を経験している母親への支援のあり方を検討していく必要性が示唆された。

Key words: diathesis-stress theories, excessive crying, postpartum depression, social support

東京都の中学校教師のメンタルヘルスに関連する要因

Related factors on mental health issues  
for Japanese junior high school teachers in Tokyo

36019 杉浦 仁美

Hitomi Sugiura

指導教員： 上別府 圭子 助教授

Tutor: A. Prof. K. Kamibeppu

健康科学・看護学専攻平成 15 年 4 月入学

Admission to Division of Health Sciences  
and Nursing in April, 2003

【緒言】教師の精神疾患による病気休職者数が年々増加し、教師のメンタルヘルスケア、および予防のための対策の必要性が指摘されている。そこで、①教師の抑うつの実態と教師を取り巻く環境の実態について再確認する、②教師の相談の実態および相談に影響する要因を探索することを目的に調査を行った。

【方法】東京都 23 区の中学校に勤務する教師 1,028 名に、無記名自記式調査票を用いて郵送調査を行った。有効回答は 125 名 (12.2%) であった。

【結果】対象となった教師の 48%が過去 1 年間に抑うつを経験したことがあり、抑うつ尺度 (CES-D) の合計得点の平均も 14.5 点と以前の報告より高かった。

対象となった教師には、「きまじめさ」、「相互不干渉」、「心の問題への関心」があるという特性があり、「年休の取りにくさ」がある職場に勤務する者が多かった。

教師は抑うつを経験したとき、相談をすることが少なかったが、相談資源として「同僚」と「家族」が選ばれる傾向にあった。「同僚」への相談では、「勤務する学校の教職員数」、「心の問題を相談できる機関を知っていること」が正に影響し、「共働きでない」、「きまじめさ」が負に影響していた。「家族」への相談では、「心の問題を相談できる機関を知っていること」、教師同士の「相互不干渉」、「年休の取りにくさ」が正に影響し、「配偶者・子ども以外と同居している」、「心の問題や相談へのネガティブイメージ」、「きまじめさ」が負に影響していた。

【考察】抑うつを経験したことがある教師が多く、教師のメンタルヘルスケアの必要性が再確認された。また教師は抑うつを経験したとき相談をしない傾向があった。教師の相談を促進するためには、職場環境の改善や教師のメンタルヘルスへの取り組みを早急に行う必要性が示唆された。

**Key words:** consultation, depression, junior high school, mental health, teacher

## 論文の内容の要旨

### 論文題目

癌専門病院における  $\beta$ -lactam antibiotic induced vancomycin-resistant MRSA (BIVR)の検出状況と薬剤感受性試験、および遺伝学的分類方法に関する研究

### 指導教官

上別府圭子 助教授

東京大学医学系研究科

平成 14 年 4 月進学

博士後期課程

健康科学・看護学専攻

氏名 細坂泰子

### 緒言

耐性菌が出現すると瞬く間に全国に拡散する。中でも methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* (MRSA)は、わが国でもっとも多い院内感染症の起炎菌である。多剤耐性を有す MRSA は難治性感染症をおこす場合が多く、入院期間の延長や予後不良に陥る症例が散見される。代表的な MRSA 感染症治療薬である vancomycin(VCM)は、1991年に静注用製剤が発売されて以来、多くの MRSA 感染症の治療に貢献してきた。しかし VCM はグラム陰性菌に対する抗菌力がないため、MRSA 感染症に併発するグラム陰性菌感染症への対応として $\beta$ -ラクタム薬が併用され、その併用頻度は 70%以上と考えられている。これらの併用は、MRSA に対して相加、相乗作用を示すという多数の報告に裏づけされた併用方法であったが、近年この併用で拮抗作用を示す MRSA が報告され、 $\beta$ -lactam antibiotic induced vancomycin-resistant MRSA (BIVR)と命名された。また BIVR の出現は、MRSA が蔓延し、かつ VCM と $\beta$ -ラクタム薬の併用率

が高いわが国特有の現象と考えられていたが、2004年にフランスおよび韓国でVCMとβ-ラクタム薬が拮抗するMRSA(BIVR)が報告されたことから、今後、世界中から検出される可能性が高まっている。

MRSAの治療薬としてもっとも使用頻度の高いVCMとβ-ラクタム薬がBIVR感染症に対して併用された場合、その治療に苦慮すると考えられる。本研究ではBIVRの臨床における実態を明らかにすることで、今後のBIVRの出現抑制と耐性化の防止及び治療指標を考察し、BIVR感染症の治療に寄与することを目的として本研究1-5を行った。

#### 研究1 癌専門病院でのBIVR検出状況に関する研究

本研究では、癌専門病院におけるBIVRの実態を調べることを目的とし、当該病院から分離された500株のMRSAを用いてBIVRの検出を試みた。さらに最適なBIVRの検出方法を検討するために、前培養にceftizoxime (CZX)添加(添加法)と無添加の従来法の条件下でBIVRの検出率を算出した。その結果、添加法では20.4%(102株)、従来法では9.0%(45株)であり、有意に添加法で検出率が高かった( $\chi^2=53.1$ ,  $p<0.001$ )。また1999年から2002年に一般病院から分離された先行研究とのBIVR検出率の比較では、本研究のBIVR検出率はやや高い結果であった。これは抗菌薬の使用頻度が高く、宿主の抵抗力が弱い癌専門病院の特性が反映しているためと考えられた。

#### 研究2 MRSAとBIVRに対する単剤抗菌薬感受性の比較に関する研究

1998年から2002年までに分離された102株のBIVRを含む500株のMRSAを対象に、抗MRSA薬としてVCM、teicoplanin (TEIC)、linezolid (LZD)、arbakacin (ABK)と、MRSA感染症に多用される抗MRSA薬以外の抗菌薬 minocyclin (MINO)、rifampicin (RFP)、pazufloxacin (PZFX)、sulfamethoxazole+trimethoprim (ST合剤)の8薬剤の感受性をNCCLSに準拠した方法を用いて比較検討した。代表的な抗MRSA薬ではBIVR、non-BIVR MRSAとも耐性化はほとんど認められなかった。またRFP、ST合剤でも良好な感受性を示し、耐性化が示されたのはPZFXのみであった。MINOは特異的にBIVRに対しての耐性化が顕著であったが、これはMINO耐性遺伝子保有のMRSAからBIVRが派生しているためと考えられた。8抗菌薬による最小発育阻止濃

度(MIC)の比較では MINO 以外に BIVR と non-BIVR MRSA との抗菌薬感受性に対する差異は認められず、単剤の抗菌薬感受性試験のみで両株を明確に区別することは困難であった。さらに、BIVR に対しても今回使用した抗菌薬の多くが感受性であり、適切な抗菌薬を投与することで BIVR を含む MRSA 感染症を治療することができることが明らかとなった。

### 研究 3 BIVR 検出培地の検討とイミペネム添加によるバンコマイシンおよびテイコプラニンの抗菌力への影響に関する研究

現在の BIVR スクリーニングで使用される Mu3 培地はコストが高いために普及しにくく、そのため BIVR の検出が遅れ治療に難渋するケースが多い。そのため安価でかつ入手しやすい材料を用いた BIVR スクリーニング培地を作成し、その培地を用いて、 $\beta$ -ラクタム系抗菌薬である imipenem(IPM)とグリコペプチド系抗菌薬の VCM および TEIC の併用効果を 99 株の BIVR、27 株の non-BIVR MRSA、27 株の MSSA について検討した。6 種類の培地で BIVR 検出培地の検討を行った結果、「Brain heart infusion Agar+4%NaCl」が BIVR の特性をもっとも反映した。この培地を用いて併用効果を判定したところ、BIVR では VCM+IPM 10 $\mu$ g/ml を除くすべての併用で強い拮抗作用が認められた。TEIC との併用では IPM 0.01  $\mu$ g/ml で弱い拮抗作用が見られたが、その他の濃度における併用では拮抗作用が認められなかった。non-BIVR MRSA および MSSA では相加・相乗効果のみが認められた。 $\beta$ -ラクタム薬が微量でも体内に存在する場合には BIVR も視野に入れた治療が必要であることが示唆された。

### 研究 4 バンコマイシンおよびテイコプラニンと $\beta$ -ラクタム薬併用時の BIVR に対する殺菌曲線に関する研究

BIVR と non-BIVR MRSA を対象に IPM と VCM もしくは TEIC との併用効果を生菌数(殺菌曲線)で検討した。BIVR に対する殺菌曲線では VCM 単剤では 99.9%の殺菌効果を示したのに対し、併用では菌が増殖した。これは同様に試験した non-BIVR MRSA とは相反する結果であった。一方、同系抗菌薬である TEIC と IPM との併用では、BIVR でも non-BIVR MRSA でも単剤に比べ残存生菌数は減少し、併用による相加・相乗効果

を示した。BIVR に対しては、単剤では効果のある濃度の VCM を投与していても併用ではその効果は消失し、一方、単剤では効果のない濃度の TEIC でも併用すれば効果的な治療法となることが示された。

#### 研究 5 パルスフィールドゲル電気泳動法(PFGE)を用いた BIVR の年次的推移の解析 および院内感染に関する遺伝学的分類に関する研究

本研究では比較的 BIVR の検出率の高い癌専門病院で検出された BIVR の起源を明らかにすることを目的として、PFGE を用いた genotype の解析を行い、かつ臨床における抗菌薬投与の指標となる薬剤感受性試験の phenotype(MIC 値)の結果を合わせた解析を同時に行った。102 株の BIVR では 85%の株が Type A に分類され、起源の同じ BIVR が長期にわたって病院内で生存していたことが示唆された。また 2000 年に検出された 49 株の BIVR と 51 株の non-BIVR MRSA の genotype が異なる分布を表したことから、BIVR は使用薬剤および免疫能による MRSA からの変異よりも、変異した BIVR が院内感染によって伝播する可能性が示された。この結果から、BIVR でも MRSA と同様に院内感染の原因菌となりえることが強く示唆された。また genotype が同一な Type A において phenotype が完全に一致したのはわずかに 8%で、PFGE では同一とみなされる株でも抗菌薬に対する感受性は異なることが示された。genotype は伝播経路の探索などの疫学調査に、phenotype は効果的な薬剤抽出の検討に優れており、genotype と phenotype を組み合わせた疫学調査を行えば、より詳細な耐性菌の伝播経路および臨床的な応用が明確になると考えられた。

#### 結論

本研究で BIVR 検出率が高かった理由として、易感染患者が多い状況で抗菌薬が多く使用される癌専門病院の特性に加え、BIVR の病院内での継続的な存続とその BIVR のアウトブレイクが示唆された。BIVR の耐性化と蔓延の防止は、院内感染対策と抗菌薬のコントロールによって達成できると考えられる。今後、BIVR の動向に注意すると同時に、新たな耐性菌を出現させないためにも積極的な院内感染に対するコントロールが必要である。

家族看護学教室 教室員 (平成 15 年度～平成 16 年度)

- 名誉教授 杉下知子 (平成 15 年 6 月～)
- 助教授 上別府圭子
- 講師 山崎あけみ (平成 15 年 10 月～)
- 非常勤講師 鳥居央子  
渡辺裕子 (～平成 16 年 3 月)  
法橋尚宏  
清水敬生  
星順隆
- 助手 小林奈美 (～平成 16 年 5 月)  
松井典子  
尾関志保
- 技術官 秋山照男
- 教室事務 浅野万里子 (平成 15 年 5 月～)
- 教育でお世話になった先生方 (あいうえお順、敬称略)
- |       |       |
|-------|-------|
| 五十嵐隆  | 関根孝司  |
| 井田孔明  | 竹永和子  |
| 岩田 力  | 戸邊さえ子 |
| 久保田雅也 | 橋都浩平  |
| 桑原弓枝  | 堀 成美  |
| 渋谷和彦  | 水口 雅  |
| 杉山正彦  | 箕輪秀子  |
| 鈴木久美子 |       |
- 大学院生 博士
- 池田智子 (～平成 16 年 3 月；平成 16 年 4 月～客員研究員)
- 杉山智子 (～平成 16 年 3 月)
- 細坂泰子
- 深堀浩樹 (～平成 16 年 3 月)
- ペスッキ (～平成 16 年 3 月)
- 涌水理恵 (～平成 16 年 3 月修士)
- 近藤佳代子 (平成 16 年 4 月～)
- 修士
- 松本和史 (～平成 16 年 3 月；平成 16 年 4 月～客員研究員)
- 古田正代
- 杉浦仁美
- 岡崎佳織 (平成 16 年 4 月～)
- 小林京子 (平成 16 年 4 月～)
- 佐藤伊織 (～平成 16 年 3 月卒論生；平成 16 年 4 月～休学)
- 上野里絵 (平成 16 年 10 月～)
- 卒論生 佐々木彩子 (平成 15 年度)
- 客員研究員 大谷尚子  
西岡光世 (～平成 16 年 3 月)  
山下仁 (～平成 16 年 3 月)

内藤直子

劔物（工藤）祐子（～平成 16 年 3 月）

大嶺ふじ子

北野（下平）和代

渡邊久美

河田みどり（平成 15 年 5 月～）

研究生

浅香知子（～平成 16 年 2 月）

日下修一（～平成 16 年 9 月）

河原宣子（～平成 16 年 9 月）

外国人研究生

陳俊霞（平成 16 年 10 月～）

家族看護学教室年報 第6号

発行年月 平成 17 年 4 月 12 日  
発行責任者 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野  
東京大学医学部家族看護学教室  
Tel : 03 - 5841 - 3556 / Fax : 03 - 3818 - 2950

